魔法大戦リリカルなのは☆うぃざーずっ！

かぜのこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法大戦リリカルなのは☆ういざーずっ！

【Ｎコード】

Ｎ９９７９Ｘ

【作者名】

かぜのこ

【あらすじ】

「魔法大戦リリカルなのはＷｉｚａｒｄＳ」シリーズの番外編、閑話などを集めた外伝的短編集です。不定期更新、一部書き下ろしアリ。

※本作はＡｒｃａｄｉａ様にも投稿しています。

しーん１　【新暦８０年、新暦６５年】（前書き）

※初っぱなからわりと致命的なネタバレが発生しています。ご注意ください。

しーん1　【新暦80年、新暦65年】

薄暗い書斎。
カーテンで仕切られた窓の外には、茹だるような厳しい夏の酷暑が広がっている。
室内は空調が効き、過ごしやすい状態とはいえ、外から聞こえてくる蝉の鳴き声には精神的な疲労感を感じざるを得ない。
書斎らしく、壁一面に備えつけられたオーク材の書棚。一般的な小説等だけでなく経済学・法律学や外交関係の専門書、分厚い哲学書、など様々な蔵書が整理整頓されており、同じくオーク材のシックなデザインの大型デスクが窓辺に据えられていた。
ギシ、と黒革のデスクチェアが軋む。
そこに深く腰掛けているのは、二十代中頃の青年。肩辺りまである癖の強い艶やかな漆黒の髪、大海を思わせる真蒼の瞳、整った多国籍風の精悍な面差しはどこか鋭くも優しげで。
ブルー系のポロシャツにクリーム色のスラックスというごく普通の服装であるが、佇まいと仕草の端々に育ちのよさがにじみ出ている。有り体に言って品がある。
彼は、ただ本を読んでいるだけで様になる。まるで一つの絵画のようだ。

「――パパっ！」

弾けるような甲高い声。バタンと書斎のドアが勢いよく開かれ、十歳前後くらいの女の子がやってくる。灰白の髪を赤いリボンでツーサイドテールに結った、くりくりとした紅い瞳がひどくかわいら

しい少女だ。
青年は顔を上げると、優しげに微笑む。そして少女の名前を呼び、自らの下に招き寄せた。
走り寄り、ちょこんと青年の膝の上に座った少女は肩越しに振り返る。

「なに読んでたの？」
「写真のアルバムだよ。書架を整理していたら出てきたんだ」
「へぇ～……あっ、ママの写真だ」

分厚いハードカバーの書物は確かに写真を納めたアルバムで。
少女が目ざとく見つけたのは白い制服を着て、小さくはにかむ女の子の写真。少し色褪せたそれは、写り込んだ人物の愛らしさと美しいブロンドの輝きを変わらずに残していた。

「やっぱり、ママは小さいころから美人さんだったのね」
「ははは、そうだね。でも君が言うと、自画自賛に聞こえちゃうかな」
「当然よ。あたしだって、ママに負けず劣らずかわいくてきれいな美少女だもの」

得意げに鼻を鳴らす少女。
おしゃまな彼女らしい仕草を見て、青年は思わず苦笑した。

「まったく、誰に似たんだろうな？」
「パパじゃないかしら？　ママでないことはたしかね」
「否定できないのが辛いな」

少女のセリフに青年の苦笑が深かまる。
たいへん利発でいい子なのだが、やや自意識過剰で自信過多なこ

の強気な少女は確かに、青年の普段の物言いや振る舞いを真似ているのだろう。どうやら、この家に時折訪れる“ぽんこつ”からも影響を受けているようだが。

「……あれ？　でもパパの小さいころの写真がないわ、どうして？」
「写真は、嫌いだからな」

何食わぬ顔で大人げないことを言う青年。実際、彼を写した写真は驚くほど少ない。かろうじて、集合写真で数枚あるくらいだ。
たとえば、今より幼い少女が自分とよく似たブロンドの女性に抱かれており、青年が女性の傍らに寄り添っている写真。オッドアイの女の子を抱いたサイドテールの女性と、眼鏡をかけた優しそうな青年が対になるように立っていて、その周囲をたくさんの男女が囲んでいた。
このように、決まって誰かと写ったものばかり。単独の写真は存在しない。

「パパは子どもねぇ」
「男ってのはみんな、いつまでも子どもなのさ」
「はぁ……」

何食わぬ顔で言い放たれた戯言、少女が白けた顔をする。
――だが、真実は少し違う。青年の好き嫌いというだけではなく、もっと不可避な理由で“この世界”での彼の幼少期の写真はなくなってしまったのだ。
青年の存在は、極々一握りの人々の記憶にだけ残り、それ以外の大多数は彼がいたことを覚えていない。
それはとても悲しいことだ。

「……ねぇ、パパ」

「なんだい？」

聡い少女は気づいていた。

それと同時に、父と呼ぶこの青年のことをもっと知りたいとも思う。

――彼が、たくさんの仲間とともに築いてきたこの平和を享受する一人として。そして、彼を父と慕う娘として。

「――むかしのこと、教えてくれない？　ママのこと、そのお友だちのこと、それから……パパのことも」

だから請う。思い出を分かち合いたいと。

「ああ、いいよ。じゃあ、何から話そうか……」

青年は朗らかに微笑み、少女の頭を撫でると、大切な思い出の詰まった記憶の本棚を紐解いた。

魔法大戦リリカルなのは☆ういざーずっ！

しーん1　「夏への扉」

“夏休み”――、それは世の学生が余すことなく待ちわびるである。

「うぅー……あぁーちぃぃぃ～……」

さて、僕こと宝條攸夜がこんなくそ暑い中を屋外で過ごさなきゃならない理由を、ご覧の皆さんに説明しようと思う。

まあ何のこっちゃない、単刀直入に言えば待ち合わせなだけなんだけどさ。

……しかし、日差しが辛い。忌々しいくらい日差しが辛い。

むしろ憎い。憎たらしい。憎々しい。

キャップ帽かぶってきてよかったよ、まったく。

『ご主人様、“心頭滅却すれば火もまた涼し”、ですよ』

左腕に巻いた無機物がのたまう。なんか久々に声を聞いた気がするのはなんでさ？

それはともかく。簡単に言ってくれるこの無機質に世の道理というヤツを教えてしんぜよう。

「夏は暑いものだろう、常識的に考えて」

月衣（かぐや）なら、本当に気の持ちようで何とでもなるってのも知ってる

けどね。なにせ、その気になれば宇宙空間でだって活動できるらしいから。
ようは気持ちの問題なのだ。
ならば夏は暑いと固持したっていいだろう。
春はあけぼの、夏は海、秋は夕暮れ、冬は雪――日本には四季があるんだからさ。骨の髄まで楽しまなきゃ損じゃない。

『魔法使いは常識にとらわれちゃいけませんっ！』
「はいはい、決めゼリフ乙」
『ネタ発言が時代を先取りしている件について』
「お前も大概だよ」

とりあえずくだらない漫才で時間をつぶしてみる。……不毛だな。
待ち人は未だ姿を見せず。暇を持て余していたので月衣の中からサッカーボールを取り出した。
んで、地面に転がしたそれに左足を乗っけて――

「よっ、と」

ボールを膝、胸と順番にトラップし、上まできたら地面に落とす。その繰り返し。たまに肩とかも使ったり。
体幹と重心を意識して、素早く正確に肉体を操作する。イメージとのズレは1ミリ以下だ、たぶん。
イメージといえば、なのはの運動音痴の原因は思考と実際の肉体スペックの齟齬らしいな。あの娘、無駄に演算能力高いから。

「やっ、とっ、ほっ――」

あとはまぁ、そんな要領で全身を使って、適当にリフティングを続けていく。

いつもはだいたい１００回くらいで失敗してしまうんだけど、そこまでやる気はない。所詮待ち人が来るまでの暇つぶしだしね。
最近、なのはのお父さんが監督をしている縁で、地元のサッカーチームの助っ人をやっている。ちゃんと入部してるわけじゃないから、あんまり派手なことはしてないけどさ。ちなみに野球はやるより観戦派です。
……だいたい、誰かに指示されたりするのは嫌なのだ。我慢ならいくらでもできるけど、その状態を続けたいとは思わない。
アインのヤツには常々『ご主人様は、もっと協調性を磨いた方がいいです！』と言われて耳たこだけど、この性格は生まれつきなんだから仕方ないだろ。
僕の魂は黄金色なのさっ！

「……むっ」

考え事をしていたら足下が狂い、ボールが明後日の方向にてんてんと跳ねていく。
そのボールを拾ったのは、日本では珍しい白みがかった金髪に緑色の瞳の少年――待ち合わせの相手、我が友ユーノ・スクライアくん。本日は人間モードでご登場だ。

「や、待たせてごめん」
「待たせすぎだ。暇で退屈だったぞ」
「ごめんごめん」

言いながら放り投げてくるボールを額でキャッチし、そのまま乗っけてバランスを取りながらユーノに近寄る。
まあ、今日の集まりはこちらが頼んだことだし、強くは出れないんだけどさ。

「にしても、ユーノが遅刻なんて珍しいな。なんかあった？」
「いや、なのはの家に遊びに来てたアリサとすずかに捕まっちゃって。逃げるに逃げられなかったんだよね」
「かわいがられたわけだ」
「まぁ、それなりに」
「お前ね、ちょっとは否定しろよ……」

このラブコメ体質め。
まあ、別に羨ましくもないけどさ。
だってほら、僕ってばアタックしてフラグ立てられて攻略される側だし――ってなんだそりゃ。変な電波受信したし。

「ま、いっか。んじゃ、行こう」
「うん」

＊　＊　＊

我が家である。
涼しい涼しい我が家である。
エアコンの効いた我が家である。
大事なことだから三回言ってみた。

「ユーノ～、ここの形容詞についてなんだけどさ」
「ああ、ここはね――」

現在、僕の自室にてミッドチルダ語のお勉強中である。
かてきょーはもちろんユーノ君。こっちでの衣食住のサポートと引き換え――ってわけじゃないんだが、なんか心苦しいので家に泊めたりしている。なのはとの「同居」はいろいろと辛いらしいからね。……ラブコメ野郎め。

キッカケは、フェイトに。
とりあえず付け焼き刃で、そのうち日常会話に使う単語は読み書きできるようになった。何度かビデオレターに紛れさせて送ってるしね。
で、そのまま何となく続けてるってわけ。こだわるときは徹底的だから、僕は。
夏休みの宿題？　んなもん、最初の週に全部終わらせてるっての……算数のドリル以外はね。

「なるほど。日本語でいうところの、“心頭滅却すれば火もまた涼し”なのかー」
『まさしくタイムリーですねぇ』
「ベルカっていう、今は滅びた文明由来の故事だよ」
「それってあれだろ？　滅びて百年もたってないのに古代扱いされてる間抜けな文明だろ？」
「間抜けって……ま、まあ、便宜上だからね」
「古代って言葉が軽すぎて、なんだか不愉快だぜ」

コンコンコン。不意のノック。

「攸くん、今ちょっといいかしら？」
「姉さん？　いいよー」

部屋のドアが開く。
白いケーキの箱と入れ立てのアッサムティーを手に入ってきたのは我が姉（叔母）、ルーチェ・モルゲンシュテルン。くるくるドリルヘアーがチャームポイントのきれーなおねいさんである。

「いらっしゃい、ユーノ君」
「は、はい、おじゃましてます」

美しすぎる年上のおねーさんの微笑みに、ユーノ君はタジタジだ。
ちなみにユーノのことは同じクラスの級友（クラスメート）と説明している。さすがに姉さんとはいえ、本当のことを説明するわけにはいかない。
二言三言、姉さんと世間話して。おお、おやつは翠屋のケーキ詰め合わせだ。……じゅるり。
「じゃあ、お勉強がんばってね」楚々とした印象と、上品な香水の香りを残して姉さんは部屋を出て行く。

「……」
「惚れるなよ、ユーノ」
「ちっ、違うよ！」
「どうだか」

ぽーっ、と姉さんの消えたドアの方を観てたユーノを適当にイジりつつ、勉強に戻る。
ミッド語を真面目に勉強してることに、邪な意図がないとは言わない。むしろポイント稼ぎとか思ってるけどね。
別れ際、あの娘にリボンを贈ったなのはに対抗して、手書きの手紙を贈ったら喜んでくれるかなってさ。実際喜んでくれたし。

『ご主人様は、案外打算的なんですね』

うっせぇ。あんな世にもかわいい女の子とお近づきになりたいと思うのは、男として当然の本能だろう、常識的に考えて。
――うぬっ、アースラとか時空管理局に、僕と同じことを考える犯罪者（ロリコン）予備軍がいないとも限らんかな。……主に黒いのとか。
うわ、なんか急に心配になってきたっ！
……潰すか？

『ご主人様は、過保護な上にヤンデレですね』

うっせぇ、大きなお世話だ。
つーかモノローグ読むんじゃなねぇよ。小癪なヤツめ。

「ユウヤ、手止まってるよ？」
「あ、悪い悪い」

――とまあ、そんな感じで。
とある夏の一日は過ぎていくのだった。

しーん2　【新暦65年】（前書き）

※時系列が前後しているのは仕様です。あらかじめご了承ください。

しーん2　【新暦65年】

はじめましての人にははじめまして。そうでない人にはこんにちは。わたし、高町なのはです。

今日は、フェイトちゃんに送るはじめてのビデオレターを収録する日。わたしの家族や友だちみんなを、フェイトちゃんに紹介するつもりです。

もちろん、黒い髪のあの子もいっしょなんだけど……。

しーん2　「高町なのはとゆかいな仲間たち」

「お邪魔します」

ガラガラっと引き戸を開けて、いつもの青いパーカーを着たまっ黒い髪の男の子がおうちの玄関に入ってきました。

待ちかまえていたわたしとおかーさんが、すかさず声をかけます。

「いらっしゃい、攸夜くん」

「いらっしゃい。あなたが宝條くんね？」

「はい。はじめまして、宝條攸夜です」

おかーさんがたずねます。攸夜くんは普段はあんまり見せない種類の――すごくあいそがいいです――笑顔で名乗り、ていねいにお辞儀しました。

「うちのなのはいつもお世話になってます」

「いえ、僕の方こそ、なのはさんには転校初日からお世話になりっぱなしで……」

「あらあら、そうなの？」

などと、わたしをおいてけぼりにして、二人は世間話に花を咲かせはじめてしまいます。

むっ、さすが攸夜くん、こういうところはやっぱりあなどれません。フェイトちゃんをそうそうに攻略しただけのことはありますね。

あ、ちなみに攸夜くんが名前で呼んでくれるようになったのは、フェイトちゃんと別れてからすぐのことです。初めはしぶった攸夜くんですが、いろいろあってけっきょく折れて“なのは”と呼んでくれるようになりました。なし崩し的に、アリサちゃんやすずかちゃんも名前で呼んでます。

「ああ、そうだ。これ、大した物じゃないですがお土産です、皆さ

んでどうぞ」
「あら、これはご丁寧にどうもありがとうね」
「中身は手作りのマドレーヌです。まあ、あんなにおいしいケーキ屋をやってるって知ってたら、別の物を持ってきたんですけど」
ほほをカリカリとばつが悪そうにかく攸夜くん。わたしは違和感をおぼえ、問いかけます。
「攸夜くん、翠屋に来たことあるの？」
「ああ、うん。前に保護者の姉貴分と一度ね。シュークリームがうまかった」
おかーさんのシュークリームは絶品なのです。
「あ、思い出した。金髪の綺麗な娘さんと一緒に来てくれてたわね」
「ええ、たぶんそれです」
へー、金髪のおねーさんですか。
なるほどー、だからフェイトちゃんにこだわってたんですね。攸夜くんはメンクイさんだということが判明しました。……アリサちゃんやすずかちゃんもわたしから見るとどっちも美人さんですが、そのへんどう思ってるんでしょうか。ちょこっとだけ興味があります。
いえ、べつに好きとかそういうんじゃないんです。フェイトちゃん、なんとなく攸夜くんのことが気になってるみたいですから、“親友”としては力になってあげたいなって。
なのはは「フェイトちゃんを応援し隊」会員ナンバー1号なのです。
「ところで、あのシュークリームのタネについてなんですけど――」

「ああ、それはね――」

あー、またお話をはじめちゃいました。なのははまたおいてけぼりです。

おかーさんたち、かなりハイレベルなお料理の話題でもりあがってます。ぜんぜんわかりません。……わ、わたしまだ小学生だから、お料理できなくてもいいんだもんっ！　うぐぅ。

＊　＊　＊

そんなこんなで“おとめごころ”を傷つけられつつ、攸夜くんを案内してリビングに移動しました。

ソファーセットのまわりには、おとーさんと、恭也おにいちゃんに美由紀おねーちゃん。それから先に来ていたアリサちゃんとすずかちゃん、フェレットの姿のユーノくんもいます。

あ、攸夜くんとユーノくんがアイコンタクトしてます。なかよしなのはいいことです。

初対面の攸夜くんとおとーさん、おねーちゃんが挨拶を交わします。おねーちゃんに「メガネがよく似合ってますね」なんて言って……、攸夜くんはいい加減にしたほうがいいと思うの。あとでちょっと“おはなし”したほうがいいかな？

「――なるほど、じゃあ今はご両親とは離れて暮らしているんだね？」

「え――――、ええ、両親は揃って海外出張中なので、叔母のところに厄介になってます」

おとーさんの質問に攸夜くんはちょっと戸惑ったように答えます。そのことが少しだけ私の心の中にひっかかりましたが、それ以上深くは考えませんでした。

そんなふうに雑談を交わして、いざビデオレターを録画しようとしたとき、私はあることに気がつきます。

「あれ、攸夜くんは？」

「……言われてみれば、見あたらないな」

「私も見てないよ」

おにーちゃんが部屋の中を見回して、おねーちゃんがそれに続きます。

ふと視線を落とすとユーノくんがつんつんと私の膝を突っつついていました。

「なに、ユーノくん？」

ユーノくんの指さすほうに目を向けると、リビングから出ようとしている攸夜くんの姿が。

いつの間にあんなところまで行ったのでしょう。

「……なにやってるの？」

「え？　あ、ああ、うん。いやさ、僕がいても邪魔だろうし、帰っていいよね？」

攸夜くんは引きつった笑顔で私の質問に答えます。

その様子に思わず、

「邪魔なわけないよ！　フェイトちゃん、攸夜くんに会いたいって思ってくれてるはずだよ？」

と声を張り上げてしまいました。でも、仕方ないよね？　フェイトちゃんからあんなに想われてるのに、ヒドすぎです。キチクです、

キチク……自分で言ってて意味わかってませんけど。

「あー、いや、それはわかってるつもりだけどさ……」

「なによ、はっきりしないわね。言いたいことがあるならちゃんと言いなさいよ」

アリサちゃんが攸夜くんを問いつめます。

「僕さ……」

なんだか気おくれしたカンジの攸夜くんは、つーっ、と視線をわたしたちから逸らしました。どうしたのかな？

「――――ビデオとか写真に写るの、嫌いなんだ」

「「はぁ？」」

その言葉に、その場にいた全員が呆気にとられるやら苦笑するやらで、変な空気になりました。わたしも「ぽかーん」です。

「ほら、写ったら魂抜かれそうじゃない？」

「アンタは明治人か！」

アリサちゃんの鋭いツッコミが炸裂します。さすがアリサちゃん、キレのあるいいツッコミです。

「攸夜君、わがままはよくないと思うよ？」

「うぐっ」

とてもイイ笑顔のすずかちゃんが、攸夜くんを確保します。エリ

のところをつかんで引きずってきました。

「ちょ、すずかさん、首が絞まってるんですけど？」

「うん、絞めてるんだよ？」

にこやかに答えるすずかちゃんの背後に、黒いモヤモヤが見えた気がしました。ずりずりと床を引きずられる攸夜くんは苦しそうにうめいています。

……まあ、ジゴウジトクですね。

そのあと、グダグダ屁理屈をこねるあきらめの悪い攸夜くんと“おはなし”して、ビデオレターはちゃんと録画できました。

フェイトちゃん、よろんでくれるとうれしいな。

ちなみに、おみやげのマドレーヌはみんなでおいしく食べました。うちの家族にとても好評でしたが、そのときに「狙いどおり」っていうカンジのわるーい顔をしてたのをちゃんと見てたからね、攸夜くん。

＊　＊　＊

次元航行艦アースラ。

件の少女、フェイトは自分に割り当てられた部屋で、つい先ほど届けられたビデオレターを見ていた。彼女の使い魔であるアルフも当然一緒だ。

『えー、というわけで僕はぼちぼちやってるよ。そっちはどう？不自由してない？』

映像に映っている自分と同じ年頃にある黒髪の少年は、照れくさそうにはにかんで言葉を発している。その様子に、フェイトは笑みを禁じ得ない。

このビデオレターを収録した際の、ちょっとした騒ぎを知っていれば違った意味で笑っていただろうが、幸いにも彼女はそんなこと知る由もなかった。

『――それと、ちょっとしたプレゼントを同封しといたから、受け取ってくれるとうれしい』

「プレゼント？」

「んー……たぶん、これじゃないかい？」

アルフが３０センチ四方程度のシンプルな白い箱を取り出す。それを受け取ると、フェイトは密かにドキドキしながら中身を確かめた。

「これって……」

「……ハエ？」

箱の中には、今のフェイトが抱きかかえるのにちょうどいいサイズのデフォルメされた毛糸製のハエのあみぐるみが入っていた。ちなみに、カラーリングは身体が黒と黄色のシマシマで、目が赤である。

「手紙がついてるね。おっ、ちゃんとミッド語で書いてあるなんて、気が利いてるじゃないか。えー、なになに……「寂しい船の暮らしに少々の潤いを。僕の編んだあみぐるみ、“ぽんこつくん十七号”を贈ります。大切にしてね☆」だってさ。

――しっかし、趣味が悪いねぇ。どうせ送るならハエなんかじゃなくて、もっとかわいらしいのにすりゃいいのに。ねえ？　フェイト？」

アルフが手紙から視線をあげると、頬をほんのり朱に染めてファンシーなあみぐるみを大事そうに抱き抱えた自分の主の姿があった。

「かわいい……」

「え〝……いや、フェイトが気に入ったんならアタシはそれでいいんだけどさ……」

軽く倒錯したように呟く主に使い魔は少し引き気味だ。

と、その時、部屋のドアが勢いよく開かれる。

「フェイトちゃん、それはさすがにないと思うの！」

そんなことをのたまって、かわいらしいデザインの白い制服に身を包んだ特徴的なピッグテールの女の子が現れた。

「えっ！　なのは！？　ど、どうしてここに？」

「フェイトちゃんへのあふれんばかりの友情で、時空を超えてやってきたんだよっ！」

フェイトが目を見開かんばかりに驚愕し、なのは？は明らかに嘘っぱちなことを口にした。というか、テンションがおかしい。

混沌とした空気が部屋に流れる中、なのは？の後ろには呆れた表情をするクロノの姿。

「艦長。戯れはそれくらいにしておいてください」

「あら、クロノ。そんなに早くバラしちゃダメじゃない」

なのは？は急に口調を変えて、つまらなそうにクロノを見やる。

クロノが“艦長”と呼ぶ人物は、このアースラにおいて一人しかいない。

「艦、長……？」

フェイトが不思議そうに呟くと、なのは？はポンと愉快な音と煙を立てて姿を消し、次の瞬間にはネイビーブルーの制服を身に纏った妙齢の女性が入れ替わるように出現した。

「り、リンディ提督ぅっ！？」

「……艦長はこう見えて、変身魔法の名手なんだ。僕も子どもの頃はよくおちょくられたものだよ」

「ごめんなさいね、フェイトさん。ちょっとからかってみたくて」

ペロッと舌を出しておどける一児の母。その息子はと言えば、頭痛を感じるように眉間に指を当てて嘆息している。

「っっっっ！！」

この後、怒れるフェイトの声がアースラの艦内に響き渡ったのは言うまでもない。

――今日も今日とて、アースラは平和だった。

しーん3-1　【新暦71年】

海鳴市の住宅街にひっそりと立つ高級マンション、その最上階。
以前は時空管理局の次元航行艦アースラのセーフハウスだったところであり、今現在はハラオウン一家のマイホームであるその一室。
メゾネット式の上階が見える、だだっ広い室内はまさに成功の象徴。ハイソな雰囲気たっぷりなここは、俺こと宝條攸夜にとっても馴染みの深い場所だ。階が一つ違うとは言え、半年ほど住んでいた場所だからな。
駄菓子菓子……だがしかし、穏やかな家族団欒の舞台となるはずのリビングは今や、公開処刑の場と化していた。

「……（にこにこ）」「……（ぴくぴく）」「……（にやにや）」

目の前のソファに腰を付けるのは、世にも恐ろしい三人の怒れる美女。この三人の前では裏界魔王も裸足で逃げ出しそうだ。
鬼子母神と阿修羅、それから……小悪魔？　あ、あとおまけの一人息子もね。
皆さん、程度は違うけど静かに怒ってらっしゃるわけで。
フローリングの堅い床に正座で黙する俺は、沈痛な面もちで頭を垂れて粛々と断罪の時を待つばかりだったのであった。
――――拝啓、母さん。俺の命運、そろそろ尽きそうです。

しーん3　「大魔王の憂鬱　～　宝條攸夜、帰還一日目のこと～」

「それで、釈明の言葉はあるか？」

ソファの横に立っているクロノさんが高圧的な口調で詰問し、こちらを見下ろしている。相変わらずいけ好かない人だが、未来のお義兄さん（確定）なので無碍にも出来ない。

ちなみにだが、正座する俺の目の前のソファに腰掛けて緑茶――息を吸うがごとく、砂糖をザバザバと入れていた――を啜っているのがリンディさんで、エイミィさんとアルフがそれぞれ左右に。クロノさんは前述のように立っていて、フェイトは俺の側に持ってきたスツールに座っている。

「いえ、全て仰る通りですハイ」

そもそも、事情を話すと言って嘘を吐いたのも、逃げるように姿を眩ましたのも事実なので否定のしようもない。

素直な態度が気に入らないのか、大胆に脚を組んでいるアルフが

面白くなさそうに「ふん」と鼻を鳴らす。

（このやろう、いぬっころの分際で……）

などと心の中で悪態を吐くが、口には出さない。というか出せない。

今、ヒエラルキー最下層を絶賛驀進中な俺である。反抗などしたら最後、フルボッコは確実だ。まあ、フェイトは優しい娘から庇ってくれるだろうけど、そんなのは男としてのプライドが許さない。だったら滅多打ちに糾弾された方が何百倍もマシだと思う。

物理的にも精神的にも四面楚歌な現実から逃避気味に、現状を整理してみよう。

――諸々のことを終えてようやくゆっくり出来るようになった俺は、フェイトの誘いで彼女の自宅に招かれた。喜び勇んで向かったわけだったのだが、そうは問屋が卸さない。というか、むしろ飛んで火に入る夏の虫？

玄関先で待っていたのはニコニコ壮絶に笑顔なリンディ・ハラオウン女史。それから、憤怒のあまり瞳孔が開ききったアルフと、にこやかだが少々危険な空気を纏うエイミィさん。ついでにクロ助、もといクロノさん。

で、なだれ込むように始まったのがこのいわゆる家族会議というわけだ。いや、床に正座したのは自分の意志でだけどさ。

「攸夜君？」

「……はい」

一家の長、リンディさんがついに口を開く。

天網恢々疎にして漏らさずだな、としょうもないことを考えていた俺は弾かれるように背筋を伸ばして居住まいを正した。

「どうして六年前、あんな嘘までついて姿を消したのか私たちに教えてくれる？」
「……あの時は、あれが最善だったからです」
「――――はぁ、なるほどね。それ以上のことを話すつもりはない、といいたいのかしら？」
「……」

無言の肯定に、ため息混じりで眉を下げるリンディさん。そんなガッカリした表情されてもこれ以上言い訳も出来ないんですが。
なお、リンディさんやクロノさんたちの記憶の修復についてだが、本人たちいわく“いつの間にか思い出した”そうだ。
おそらく、俺とこの世界とを繋げたキーであるフェイト――正確には彼女の所持している“モノ”――に接触したことで、誘発的に修復が起きたのだろう。速度というか可能性の要因は俺との繋がりの深さ、と言ったところか。
アリサやすずかなんかは顔を合わせてすぐに思い出してくれたしな。

「いいか？　大体、君はだな――」

そして始まるクロノさんのお説教。ミッドチルダでひと暴れしたことについては無論、六年前の素行の悪さまで掘り返しては延々と続く。
至極まっとうな正論だし、反論する気など毛頭ない俺は神妙な顔をして「面目次第もありません……」と答えるだけだ。
クロノさんはどうやら返答がお気に召さなかったようで、眉間に皺を寄せて憮然とする。

「僕が聞きたいのは、そういった当たり障りのない謝罪の言葉じゃないんだ」

「お兄ちゃん、ユーヤも反省してるんだしそれぐらいで、ね？」
「しかしだな……」
俺の窮状を見かねてフェイトが助け船を出してくれる。
だがね、お嬢さん。残念ながらそいつはこの場じゃ逆効果なんだよ。
「フェイト、あなたは少し黙っていなさい。反省しているしていないはこの際、関係ないのよ」
「そうだよ、フェイト。アタシも頭に来てるんだからね」
「今回ばっかりはおねーさんも擁護できないな〜。攸夜君、おいたがすぎたね」
ほら来た。リンディさん、アルフは勿論のこと、傍観を決め込んでいたエイミィさんまで同調。マシンガンのごとく矢継ぎ早に畳み掛けられたおかげ、でフェイトは涙目だ。かわいい。
おおう、女性陣の醸し出す鬼気に気圧されてクロノさんまで引いてるじゃないか。
「攸夜君」
騒然とする場の空気を締めるように、リンディさんが声を発する。
「正直言って、あなたには失望しました。――そういうわけだから、フェイトとのおつき合いは認められません」
「は……？」
はいいいいい！？
いきなりしれっとナニ言ってやがるんですかこのお人はッ！

「ちょ、まっ！？」
「か、母さん！？」

不意打ちに、フェイトが血相を変えて動揺。俺も似たようなものだろう。ていうか、どういう話題転換だよ。
渦巻く感情のコントロールに苦慮して言葉を窮していると、クロノさんが口を挟む。

「いや、母さん待ってくれ。確かに僕もこんな奴との交際には大反対だが、今その話は関係ない――」
「はいはい、クロノ君はちょっとあっち行ってようね～」
「エイミィ、いつの間に！？　は、放せっ！　僕の話はまだ終わってないんだぞ！」

が、後ろからエイミィさんに羽交い締めにされて、どこぞに引きずられていく。男女の体格差を無視とは……恐ろしい。
……あれ？　何かムカつくこと言われたような気がするんだけど。まあ、いいか。

「フェイトもいいわね？」
「い、いやっ！」

意識の糸を紡ぎ合わせたフェイトが、“母親”の言葉に反発して声を荒げる。クールというか、穏やかであまり感情を露わにしないタイプのフェイトにしては、らしくない反応だ。
それから、横合いから寄ってきてぴったり抱きつかれた。

「やっと……、やっと逢えたのにユーヤと離れるなんていやだ。母さんがなにを言っても、別れたりなんかしないから！」

瞳を涙で潤ませて強く主張するフェイトの横顔に、俺は心を打たれた。好きな女の子にここまで想われて、嬉しくならない男が居るわけがない。彼女の気持ちに応えるように腰に腕を回して抱き寄せる。ほっそりと引き締まったくびれに少しドキドキしたのは秘密だ。

両者はぴりぴりと緊張感漂わせて膠着状態に陥っている。若干以上にフェイトが押され気味か。

ふと視線をやると、アルフがフェイトの言葉に腕を組み、うんうんと感慨深げに頷いていた。……味方してくれてる、のか？　少し意外だな。

「……その子はそう言っているけど、攸夜君はどうする気なのかしら？」

「そうですね……」

試すような物言いに引っかかるものを感じながら、腰を軽く浮かして正座から片膝立ちに。視線は、毅然とした母性溢れる表情のリンディさんに向けたままだ。

「フェイトを連れて駆け落ちでもしますよ。もう絶対に離さないって約束しましたから……今度こそ、ね」

腕の中のフェイトが驚く気配を感じつつ、分割思考を駆使して逃走のリスクをシミュレートする。

六年前とは違い、今の俺には時空管理局そのもの（・・・・）という絶大な後ろ盾がある。当時、考えたように逃げ隠れする必要もないし、やりにくいとは思うけどフェイトも仕事を続けられるはずだ。

借りを作ることになるが、評議会のじじいからミッドの戸籍を買って定住するってのもまあ悪くない。“故郷”を捨てるなんて本意じゃないけどな。

管理局上層部の後ろ暗い――というか、ドス黒い実状を少なからず垣間見たから言える。あの時、短慮に走らなかったのは正解だった。

下手に逃げ出して隠れ住んだとしても、まともに生活が出来るものではないし、捕まった後にふたりで仲良くモルモット、という未来もあり得たかもしれない。

それを考えると虫酸が走る。

正直、俺自身はどうなろうとかまわないが、フェイトは言うまでもなく別だ。そんな姿、想像するだけでも発狂しそうなくらいに胸くそ悪い。

「ユーヤ……？」

ザリザリと、脳髄を削られていくような感覚に苛まれる俺を、フェイトが心配そうに見上げている。「大丈夫だよ」と笑いかけて向き直る。

「いい加減、不毛な腹の探り合いは止めませんか、リンディさん。フェイトが怖がってますし」

「あら、気づいてたの？」

リンディさんが相好を崩して、はんなりと上品に微笑む。やっぱりか。

まったく意地が悪い人だ、と内心で文句を垂れて種明かし。

「あんな唐突な話題の変え方じゃ気付きますよ、そりゃ。何より、リンディさんのキャラじゃありません、あんなの」

「ふふ、そうかしら。……ごめんなさいね、現役時代の癖がなかなか抜けなくて。それに、“こういうこと”一度やってみたかったの」

うふふ、とお茶目に笑ってウィンクする二児の母。間の抜けた様子に力が抜ける。「お前なんぞにうちの娘はやらん！」ですかそうですか。

というか、心臓に悪い冗談は止めてください。マジで。

「えっ、と……？」

「俺たち、どうやらリンディさんに一杯食わされたらしいよ」

「それじゃあ……」

「ええ、母さんは賛成よ。攸夜君の人となりは、重々承知していますからね」

ふわりとした微笑。

あるいは、今回の吊し上げは俺を試すためのものだったのかもしれない。随分な歓迎ですねっ！

「さあ、お夕飯にしましょう。今夜は攸夜君が帰ってきたお祝いよ」

「あ、俺も手伝います」

立ち上がったリンディさんに倣って腰を上げる。が、フェイトにシャツの裾をガシッと捕まれて止められた。

「ユーヤはお客さんなんだから座って待ってて」

「いや、でもな……」

「いいからっ。行こう、母さん」

言うが否や、フェイトがキッチンへてててっと駆けていく。「攸夜君、ゆっくりしててね」と言い残したリンディさんと、いつの間にか子犬モードになっていたアルフがその後に続き。キッチンの方では、エイミィさんがすでに準備をしていたようで、彼女と合流すると調理を開始しされた。

この場に残されたのは、フェイトの普段見れない押しの強さに呆気にとられた俺と、むっつりやってきてソファに深く腰掛けたクロノさんだけ。
男は体よく蚊帳の外に閉め出されてしまった格好だ。……仲間外れにされたみたいで少し府に落ちないが。

（まあ……、いいか）

けれども、楽しそうに調理をしているフェイトを眺めていたらそんな些末事、どうでもよくなってきた。どうやら新しい母親や家族とも上手くいっているようだし。
――それに、だ。
黄色いエプロンを着こなしたフェイトは、筆舌に尽くしがたいほどキュートで、かわいくて、愛しくて。
俺は、そんな彼女の姿を見ているだけでホクホク満足していたのだった。

しーん3-2　【新暦71年】

白いダイニングテーブルを囲んでの会食の時間。“お祝い”というだけあって、テーブルに乗った料理はなかなかに豪勢だ。
メインには熱々のラザニアに具だくさんのクリームシチュー、焼きたての海鮮ピザなどなど。サイドメニューは、山ほどのシーザーサラダとふかふかのバゲットだ。どれもハンパなく大量に用意されている。……張り切って作ってくれたのは嬉しいけど、俺、こんな食えないぞ？
それはともかく。欧州の香りたっぷりな献立はなるほど、ミッド風であるとも言えた。聞いた話によると、ここ（地球）から向こうに移住したヒトの子孫とかもいるらしいしな。

「……」

とりあえず、フェイト自ら焼いたというピッツァ（ピザに非ず）を食べてみることにした。何故にそのチョイスなのかは永遠の謎である。テスタロッサだけに、なのか？
……ふむ、見た感じは悪くないな。いや、むしろよく出来ている。手作りの生地もちゃんと丸くなっているし、トマトソースの赤い絨毯に乗ったエビやイカ、ホタテなどの魚介類が色鮮やかに食欲を誘う。
二等辺三角形に切りそろえられた一枚を手に取る。とろとろに溶けたチーズが糸を引いててうまそうだ。
隣で心配そうにこちらを見ているフェイトを視界の隅に納めつつ、パクリ。

……。んむ、なるほどなるほど。

「ど、どお……？」

おずおずと探るように尋ねるフェイト。小首を傾げる仕草が小動物みたいですごくかわいい。

あんまりかわいらしいもんだから、ちょっといじめたくなる。がまあそれは思うだけにしておいて、素直に感想を言ってあげることにしよう。

「ああ、すごくおいしいよ」

過剰な装飾は必要ない。恋人の手料理、という欲目を抜いても本場顔負けな味だと思う。イタリアに行ったとき、実際に食べたからよくわかる。

俺の感想に、ぱああっと表情を明るくしたフェイト。「よかった……」と安堵のため息を吐く。

もっとたくさん食べて、とのリクエストに応え、俺はほとんど全部平らげた。……満面の笑顔でそんなこと言われたら、食べきるしかないじゃないかっ！

「あっ、ユーヤ、口にソースついてるよ」

「ん？」

白いハンカチが口元に伸びてきて、赤いソースを拭い取っていく。……何だかすごくデジャヴを感じるな。

「うん、とれた」

――ああそういえば、前にもこんなことあったっけ。よし、これ

をネタに少しイジってやろう。

「ありがとな。……それにしても、指で拭って食べてくれないのか？」

「っ！　も、もうそんなことしないよっ！」

フェイトが肩を怒らせ、必死に否定する。かああっと音が聞こえるくらい、真っ赤に茹で上がってちゃ怖くも何ともないがな。

畳み掛けるように「それは残念だ」と煽ったら、恥じ入って俯いてしまった。

「……」

ふと不審な視線を感じて周りを見渡してみれば、ぽかんと間抜けな表情をしている人々。

足元でステーキ肉にかぶりついていたアルフまで、馬鹿みたいに口を開けて見上げてやがる。

みんな、食事の手を止めて凍りついていた。

――あ、いや、リンディさんだけは、あらあらうふふと捕らえ所のない上品な微笑してるけど。

「何です？」

どうして固まってるのかは大体予想がつくので、白けた視線を送り返してみた。

「いやー、仲がおアツいなぁと思って」

再起動したエイミィさんが代表して答える。気まずそうに苦笑しているが、シレッとからかってくる辺り油断ならない。ま、その程

度じゃ俺は動じないがな。
ではお返しに、もう一つ爆弾を投げ入れてみますか。
「羨ましいでしょう？　そういうお二人はどうなんです？」
「おおっと、そう切り返しますか。腕を上げたねぇ、攸夜君。ちなみにその質問については黙秘権を行使するよ」

何の腕だよ。
エイミィさんは一転してころころ楽しげに笑っているが、クロノさんは軽く赤面してシチューをかっこんでる。
しかし、カマを掛けただけなんだが当たりだったか、このむっつり屋さんめ。
フェイト？　会話の意味がわからなくてキョトンとしてるよ。
「あ、そうそう！　ねえ、ふたりってどこまで進んでるのかな？」
興味津々に瞳を輝かせるエイミィさん。この会話の流れならそういう話にもなるだろうさ。
「キスまでですよ」
「「！！」」
何気なく正直に即答したら、ざわりと場の空気が騒然となってしまった。主に、狼狽したフェイトとクロノさんが盛大に吹き出したことによって。
むせてるフェイトの背中をさすってあげると、恨みがましい目で見られた。
そんな目で見ないでくれ。無性に罪悪感が湧いてくるから。
「いや、ごまかすようなことでもないだろ？　男と女なんだからさ」

「わぁ、大胆」

言いながら、エイミィさんはチラリと横目でハラオウンさんちの長男を窺う。当の本人は気まずそうにサッと視線を逸らして咳払い一つ。エイミィさんがはぁ～、と大きなため息をもらす。

――とまぁこのように、夕食は概ね和やかに進んだ。

そんな中、リンディさんが興味深そうに目を細めて、俺を――いや、俺とフェイトを眺めていたのがやけに印象に残った。

余談だが、明らかに作りすぎだと思われていた食事は、フェイトさんがペロリと平らげてくれましたとさ。

ちゃんちゃん。

＊　＊　＊

夕食後。

バスルームからリビングに向けて歩きながら、水分をたっぷり吸ったごわごわの髪をタオルで叩くように乾かす。成長して髪質が変わったのかは知らないが、最近さらにボサボサになって正直鬱陶しい。

ソファに座ってお茶していたリンディさんとフェイトが、俺の気配に気づいて振り向いた。

「攸夜君、お湯加減はどうだったかしら」

「はい、いいお湯でした」

「そう、それはよかった。じゃあフェイトもいってらっしゃい」

「うん。じゃああとでね、ユーヤ」

名残惜しそうに手を振るフェイトは、俺と入れ替わりで廊下に消えていく。ぱたぱたとスリッパが慌ただしく床を叩く音が耳に残った。……ていうか、あんなに落ち着きのない娘だったっけ？

このやり取りからもわかるように、今夜はハラオウンさんちに泊めてもらうことになった。
その経緯を説明しよう。
まず前提として、フェイトは中学を卒業するまで海鳴に居る予定だという。当然のことだが、これから彼女とつき合う――もちろん、男女の仲的な意味で――には根無し草ではどうにもよろしくない。まあ、戸籍なんかは割と簡単に偽造出来るんだけどさ。
しかし、以前住んでいた部屋はすでに埋まってしまっている。だから、仮の住まいとして近場の適当なアパートなりを間借りするつもりでいたんだが、姉さんの強い意向もあって何故か隣り街――遠見市、だったか――の高級マンションということになってしまった。
姉さんいわく「由緒正しい裏界魔王がそんなところに住むなんてみっともないわ」とかなんとか。プライドが高すぎるのも考え物だ。
でだ。その住処を準備するにはどうしても時間がかかる。家具やら何やらだって揃えなきゃならないから、今夜は野宿でもしようかと思っていた。幸い野営には慣れてるし――その理由については後ほど語ることになるだろうが――、月匣というかフォートレスを張っておけばそれで済むしな。
それを夕食の場で話してみたらフェイト以下、その場の全員から大いに反対されてしまい――、まあ、そんなこんなでお泊まりとなったわけである。ちなみに後でホテルでもとればよかったと気づいてちょっとへコんだ。

「攸夜君、ひとついいかしら」

ソファに腰掛け、風呂上がりの気だるさを楽しみながら、つらつらと今後の予定などに思惟を伸ばしていると、リンディさんに改まって呼びかけられた。
その表情はどこか硬い。

「あ、はい、何ですか？」

薄い湯気を上げる湯飲みがコトリと白いリビングテーブルの上に置かれる。

「さっきのお話の続きだけれど」

「さっきの、というと？」

「フェイトとのおつき合いのことについてよ」

む、まだ何かあるのだろうか。俺は警戒して、弥が上にも気が引き締まる。

わざわざフェイトが不在の場で切り出すくらいなのだから、彼女に聞かせられない内容だということは想像に容易い。

「あなたたちの交際はもちろん認めるわ。もともと、私も応援していたことだから。でもね、血の繋がっていないとしても母親としてはその……、あなたたちに年相応の節度を持ったおつき合いをしてほしいと思うの。

あ、そんなに難しいことじゃないのよ？　ただ、あの子……そういうこと（・・・・・・）に少し疎いというか鈍い子だから、攸夜君に気にかけてもらいたいなって」

ほら、女の子はいろいろと大変でしょう？　とやや言葉を濁す疑問系で結尾が切られた。

……なるほど、そういうことか。確かにフェイトには聞かせられないな。直接的な表現は避けられてるけど、言葉の意図は容易に掴める。念を押したいのだろう。

「仰りたいことはわかっているつもりですし、リンディさんが懸念するのはもっともだと思います。

安心してください。もともと少なくとも中学を卒業するまでは、プラトニックなつき合いにとどめていこうと思ってましたから。フェイトのこと、大切にしたいし……何より俺たちはまだ、子どもですしね」

大切にしたいというのは勿論、偽らざる想いだ。けれども、そこに俺自身の感情が含まれていることも否定できない。

俺のポーカーフェイスは見抜かれなかったようで、リンディさんの表情が和らいだ。

「そう、わかってくれているなら私からはもう言わないわ、無粋だものね。……信じてますからね、攸夜君？」

リンディさんの浮かべるいわゆるコロす笑みに、背筋が総毛立つ。冷や汗をダラダラと流して、脊髄反射的にぶんぶん首を縦に振っていた。

ドラ息子の本能という奴だろうか、この人にはたぶん生涯逆らえないだろうというイメージが脳裏を過ぎる。

とはいえ、反目したりするつもりなど毛頭ない。やぶ蛇になってもつまらないし、何より俺の今の基本的な行動方針は「親善親睦親和親交」――当然相手にも寄るけど、敵対するより味方にした方がずっといい。人間関係を円滑に、よりよい方向に進めるには時に譲歩し、自分の意志を曲げることだって必要だ。

まあ、人類みな兄弟、なんて妄言は吐かないけどな。

「さて、と、堅苦しいお話はこれまでにしましょうか。素直にお願いを聞いてくれたご褒美ってわけじゃないけど、フェイトのアルバムでも見てみる？　昔のフェイト、ちっちゃくてかわいいわよ～」

なん……だと……！？

「是非ッ、是非に見たいですお義母さんッ！」
「あらあら、気の早い子ね」
俺の問題発言を優雅な微苦笑で流すリンディさん。どうやら満更でもない様子だ。
そのあと、アルバムの写真を肴に大いに盛り上がった。
風呂から上がったばかりのフェイト――レモン色でわんこ柄のパジャマはかなりかわいかった――に見つかって、恥ずかしがった彼女と一悶着あったのはまったくの余談である。
こうして、初日の夜は賑やかに更けていった。

しーん3-3　【新暦71年】

女子校――――それは女の花園。魅惑の言葉。男どもが入り込めない禁断の領域だ。
そんなところに、俺は居る。
ふはは、羨ましかろう愚民どもッ！　……とか言いつつぶっちゃけ何らかの感慨があるわけでもなかったりするんだが。
何故なら俺は、今も昔もフェイト一筋だから。他の女の子なんて眼中にないのだ。
さておき、時は真昼。
女学生たちが弁当片手に、思い思いの場所でおしゃべりに花を咲かしている頃である。
聖祥大附属中の屋上、その一角。ニスの塗られた木製のベンチの上に立ち上がった（・・・・・・）俺を取り囲む、五つの大きな人影。誰もが見惚れる見目麗しい美少女たちだ。

「――で、この薄汚いのはなんなわけ」

人影の内の一つ――見上げるように巨人なアリサが言う。いや、俺の方が小さいんだけれども。
しかし、薄汚いなんて失礼にもほどがある。風呂くらい毎日入ってるっつーの。

「薄汚いとは何だツンデレ」
「ツンデレ言うなっ！　……ってやっぱり攸夜、アンタだったのね」
「なんだかかわいいよね。なんの動物だろう？」

頭痛を感じたように額に手を当てるアリサ。ほんわかとした雰囲気ですずかがほんわかとした感想を述べると、なのはがそれを受けて口を開く。

「えっと……たぶん、フェレット、かな？」
「たぶんじゃなくて、フェレットなの。ユーノのヤツからコピったんだ」

そう。俺は今、フェレットに姿を変えているのだ。真っ黒なイタチを想像してもらえればいいだろう。……言うまでもないと思うが、どこぞのハーブみたいな名前したエロオコジョみたいに、公序良俗に反するようなことは何一つしてないぞ。ずっとフェイトと一緒だったし。

「ユーノくんからコピったって……」
「フェレットモード、けっこう便利だよね。私もユーノから教えてもらったから使えるよ」
「ふえっ、そうなのっ！？　そんな話、私聞いてないよっ！？」

フェイトの何気ない一言に、やにわに動揺して食ってかかるなのは。ふーん、珍しいこともあるもんだ。……ユーノのこと、意識しだしてきたのか？

そのまま目をぐるぐるさせて暴走するイノシシ娘を「まあまあ落ち着いて。あとで教えてもらえばええやん」とはやてが至極真っ当な正論でなだめ、話題を変える。

「しかし、なんでまたフェレットのカッコでこんなところにおるん？」
「いや、フェイトがどうしても離れたくないって言うもんでな。こ

うして、小動物の姿で近くに居たんだよ。たまに念話したりなんかしてさ」

なあ？　と視線を上げて同意を求める。赤面したフェイトからの返答は、「ぅ、うん……」とまるでシャボン玉のように尻すぼみ。まったくめんこい娘さんだこと。

「うんまあ、そないなカッコしてる経緯は理解したけどな……」

歯切れの悪いはやてに、なんか文句あんのか、と視線で問い掛ける。

すると微妙な表情をしたはやては、困ったように周りを見回す。フェイト、なのはとアリサは首を傾げているが、すずかだけはどうやら意図が読めたようで苦笑いした。

「なんつーか、真っ黒やし」

「体毛の色なんだから仕方ないじゃないか」

イタチ科の生き物で黒一色の種類は居ないんだよな、確か。どうでもいいトリビアだな。

「言いたいことがあるならはっきり言えって」

ちびだぬき――もとい、はやては神妙な面もちので勿体ぶった間を作る。ゴクリ……、無意味な緊張感に誰かが喉を鳴らした。

「あんな……」

そして、ついに重い口が開かれる。

「なんかその姿、ヒワイな気がするんよ」
「ひわっ、卑猥ぃっ！？　なんでさッ！？」
「黒いし、長っ細いし」

ぐ、ぐぬっ……！　否定できない……ッ！！
ナニを指しているのか理解したなのはとアリサが頬を軽く染めて俯く。相変わらずフェイトはぽややんとしてるが。

「そ、そういうイジられ方するのはユーノの持ちネタじゃないかッ！！」
「そのセリフ、ちょっと聞き捨てならないんだけどなー」

再起動を果たしたなのはから浴びせられたのは、ツンドラのごとき冷たさを帯びた声。

「うー！　うーうー！」

進退窮まった俺。逃げるようにベンチから飛び降りて、開けた場所で変身魔法を解除。ボン、と愉快な破裂音と白煙を巻き上げて元の姿に戻る。その服装は黒い学ラン――廃棄都市で、真行寺命たちを待ち受けていた際にも身に着けていた輝明学園秋葉原校中等部指定ものだ。

「これでいいんだろ！　これで！」
「……なにも泣かなくてもいいじゃない」

呆れたアリサのツッコミが、グサリと胸の柔いところに突き刺さった気がした。

＊　＊　＊

昼休みの時間は有限だ。
気を取り直して昼食を摂ることに。なお、さっきの茶番で負った心的外傷はフェイトに癒やしてもらいました。

「あれ？　フェイトちゃん、お弁当は……？」
「あ、うん、それはね」

なのはの素朴な質問に、手ぶらのフェイトが嬉しさを溢れさせてこちらを向く。
俺は軽く笑みを返すと目の前に両手をかざした。
ヴンッ、と音を立てて月衣の中から、三十センチ四方二段重ねで漆塗りの豪華な重箱が手の中に現出する。早朝から借りたキッチンにて作った自信作だ。
ついでに六畳ほどもある大きな莫蓙を出してやる。

「さあさ、お前らもぼーっとしてないで座れ座れ」

ひとまず重箱を床に置いた後、莫蓙をバサリと広げて硬直しているなのはたちを促す。まあ、理由はわかるが。これくらい慣れろ、“魔法使い”の基本だぞ？
事前に伝えていたフェイトは当然フリーズなどせず、さっさと俺のすぐ隣に着席。ちょっと遠慮気味なのがまたかわいらしい。

「ナップザックん中から竹箒が出てくるんも衝撃やけど、これはこれで効くなぁ」
「何言ってんだ。俺にしてみれば宝石とかバッチが杖になる方が驚くっつーの」
「どっちも非常識よ！」

さすがバニングスさん、鋭いツッコミをありがとう。
ああ、ファー・ジ・アースの魔法科学でも似たようなことが出来るって指摘は簡便な？

「「「「「「いただきます」」」」」」
「どうぞ召し上がれ」

そんなこんなで昼食。
かなり多めに作ってきた弁当をフェイトはもちろん、なのはたちにも振る舞った。
俺も含め、皆食べ盛りな中学生、好評の内に次々とおかずが減っていく。女の子ってのはみんな少なからず食べるのが好きだしな。
で、おかずをあんまりにも食べられるもんだから、フェイトがへそを曲げてしまい、機嫌を取ろうと「あーん」ってしたらしこたまからかわれたのには参った。……フェイトには悪いことしたな。

「――ところで攸夜君、学校ってどうしてるのかな？」

和気あいあいと食事が進む中、どこか非難するような声色で問うすずか。鋭い洞察はさすがだが、その不良を見るような目つきは止めてほしい。

「ちゃんと行ってるよ。こっち（・・・）じゃないけどな」
「こっちじゃない言うたら、ファー・ジ・アース？」
「正解。毎度おなじみ輝明学園秋葉原校の中等部に一応在籍してるよ」

なにが毎度おなじみよ、というアリサを華麗にスルーしてイモの煮っ転がしをパクリ。……んむ、我ながらなかなか上手く味が染みている。悪くない。

――こちらから主八界に渡った俺は、マジカル・ウォー・フェア最終決戦のおよそ五年前に転移していた。殆どの力――ウィザードとしては十分すぎるほどだったが――を封じられた状態で、だ。
それが戻ったのはオリジナルの宝玉が砕け散った後のことであり……、そういうわけもあって帰還には思いの外時間がかかってしまった。
で、俺はその時間のズレを「ちゃんと義務教育くらいは受けなさいよ」という母さんの意向と判断し、輝明学園秋葉原校に紛れ込んで生活していたのである。あそこ、門度が広いから俺たち裏界勢力も入り込みやすいし、社会勉強の一環でウィザードとして活動するにもいろいろと都合がいいからな。
この辺りの話は昨夜リンディさんたちを交えて説明してある。それ故か、フェイトは訳知り顔でだし巻き卵をパクついていたり。しかしフェイト、箸の使い方が様になったな。
だがひとつだけ、こちらに来て説明していないことがある。力が戻ったあとに決行した裏界での武者修行についてだ。
自重しない馬鹿どもとやり合って腕や脚を潰されたり、内臓破裂などで死にかけたことなど一度や二度じゃない。……主にグラーシャとかグラーシャとかグラーシャとか、あとたまにマルコとかにも。
そんな、刺激の強すぎることを話したらフェイトなど卒倒しかねない。言わぬが花、というヤツだ。

「でも、攸夜くんここにいるよね？　サボリ？」
「ああ、それは現し身を置いといてだな」
「現し身、って？」
「実体のある分身みたいなもんだと思ってくれればいいよ。で、そいつを替え玉にして、たまに送ってくる情報を受け取ってるって寸法さ」
「なんや、どこぞの金髪碧眼忍者みたいやな」

「訓練の効率が倍々になったりとかはしないけどな」

エミュレイター、魔王というのは何も常に日本だけで活動してるわけじゃない。複数の国、複数の場所で並列的に策動することも必要だろう。そんな場合に、こういった情報召集用の半自立型現し身を用いることもある。

……まあ、どういうわけか揃いも揃って日本にご執心な奴らばっかなのが不思議だけど。

便利な現し身であるが、気を付けなきゃいけないのは増やしすぎると本体や現し身自体が弱体化することだろう。現し身の作成に魔力や“プラーナ”が削られて死に体になった、なんて目も当てられない。本末転倒もいいところだ。

そういや、分身しすぎて自分の首を絞める冥魔王が居る、とか姉さんが笑い話にしてたっけ。えーと、名前は確か――、エン、エン……エンなんとかさん？

閑話休題。

「だから俺はちゃんと学校に通ってるんだよ。この制服も中等部のものだしな、生徒会長用の」

ふーん、と声を揃える一同。

「……」

数瞬の沈黙。

不自然な間を訝しみ、眉間の皺を深くすると――――

「「「「「えええぇぇぇーーーっ！？」」」」」

驚愕極まりない、悲鳴ような声が見事にハモる。何がそんなに驚

きなのかは知らないが、仲のよろしいことだ。

「う、ウソよっ！　そんなの信じないんだから！」アリサが声高に否定する。目がなんか虚ろだ。

「せや、なんかの間違いに決まっとる！　攸夜君がそんなことするんて世界の終わりやっ！」同調して頭を振るはやて。飛躍しすぎだ馬鹿野郎。

「うぇっ！？　だって、生徒会長さんだなんてそんなっ、ふぇえぇぇっ！？」なのは、お前は吃りすぎだ。少し落ち着け。

どこかズレてるフェイトは平然として「ユーヤ、すごいねっ」、と屈託のない尊敬の込められたキラキラする眼差しを向けられた。まあ、悪い気はしないな。

同じく落ち着き払った様子のすずかが、「あっ」と何かに気づいたように声を上げる。

「そういえば攸夜君、クラス委員とかしてなかったっけ？」

「あー、言われてみればそんなこともあったような。……よく覚えてるわね、すずか」

「うん。攸夜君らしくないな、って印象に残ってたから」

すずかのセリフに騒然とした空気が静まった。

らしくないのは認めるが、他人に仕切られるくらいなら自分でやった方がマシじゃないか。どうせ決めるのにゴタゴタするなら自薦した分、時間の無駄もない。ついでに俺がやるんだから完璧に仕事をこなすしな。

「はふぅ～……なんだか私、ますます攸夜くんがなにやってたのか気になってきたよ」

「そんなこと言われてもな」

力いっぱい騒いで疲れたのか、ぐったりした様子のなのはが嘆息する。

「――――そのご質問、僭越ながらこの私がお答えしましょう」

不意に響く、甘くとろけるような女性の声。背後の空間が歪むのを関知して、すぐさま振り向く。

そこにはこの数年で嫌というほどよく見知った、眼鏡のメイドが営業スマイル全開で佇んでいた。

しーん3-4　【新暦71年】

驚きを隠せない俺たちに向けて褐色の肌の闖入者、“誘惑者”エイミーが恭しく一礼する。

「若様のお世話役兼教育係を仰せつかっておりますエイミー、と申します。ふつつかな魔王ですが、なにとぞよろしくお願いします」

言って、90。ピッタリに再度お辞儀するメイド魔王。さすがは我が礼儀作法の師、相変わらず非の打ち所のない完璧な所作である。

フェイト、なのは、はやてがほぼ同時にビクリと肩を揺らして全身を強ばらせた。どうやら魔王という単語に反応したらしいが、無理もない、実際戦って痛い目を見たんだものな。

アリサとすずかはさすがお嬢様、メイドなど珍しくもないようだが。

「エイミィ、さん？」

「エイミーです。くれぐれもお間違えないように」

「ご、ごめんなさい」

ある意味お約束のやり取りの後、エイミーの全員から「若様？」と疑問の視線が一斉に突き刺さる。気まずいので、咳払いして話題を無理矢理に切り替えることにした。

「ゴホン。……エイミーお前、住処の準備をしてたんじゃないのか？」

アインを思い出すので、「ご主人様」と呼ばせないのは失敗だったかもしれない。他にもそう呼びたがる部下（ヤツ）が何人かいて、毎回訂正するのが面倒だ。

「はい。ですが、そちらはすでに整えてありますのでご心配なさらず」

もちろん電化製品の設置も完璧ですよ、などと当てつけのように余計な一言を付け足して。

――同じ、“金色の魔王”の派閥に組するものとして、そしてそれ以上に保護者代わりだったり帝王学の講師だったり家事全般の師匠だったり……このメイド魔王は割と古い顔馴染みだ。知られたくないことまで知られている、とも言えるが。

「攸夜くん、機械音痴まだ直ってなかったんだね」

「うるせぇやい」

苦笑いするなのはの態度に、俺は不良座りでやさぐれる。

大体、説明書からして分厚すぎるんだよ！　あんなもん読んでられるかっ！

「だいじょうぶだよ！　これからは、ユーヤの代わりに私が全部ずーっとやってあげるもん！」

フォローのつもりなのか、フェイトが声高に主張する。

そう言ってもらうのはすごく嬉しいけど、何だか逆に情けなくなってきたよ。

「あらあら、若奥様ったら大胆ですのね。それではまるで、生涯を

供にすると宣言しているように聞こえますよ？」
「おくさっ！？　なななななっ、なっ！？」

ぼふっ、と音を立ててフェイトが茹で蛸のように真っ赤に湯立って狼狽える。
――あー、くそっ、俺も釣られて顔が熱くなってきたじゃないか。

「若様の奥方となられる方なのですから、そうお呼びするのが筋かと」

にこやかに、とんでもない発言をするメイド魔王。
“いつかそうなること”について否定はしないが、今言うことじゃないだろう。ほら、なのはたちもちょっと引いてるし。というかフェイト、小声で「若奥様、ちょっといいかも……」とか言ってるんじゃない。
話が一向に進まないことに軽く苛立った俺は、少し強めの口調で諌める。

「いちいち茶々を入れて混ぜっ返すな。それで、こんな場所までやって来て用向きは何だ？」
「はい。皆様があちら（・・・）での若様のご様子がお知りになりたい聞き及びまして、ご説明に上がった次第です」
「そんな気遣いは要らん。お前はファミレスでバイトでもしてろ」
「あっ、知りたい！　でもどうやって……？」

なのはがわずかな警戒心も投げ捨てて食いつく。他の面々の表情も嬉々としていて似たようなものだ。

「それは、こちらのアルバムをご覧になればよろしいかと」

波打った空間から、すとんとエイミーの手の中に落ちてくる一冊の分厚い書物。
鮮やかな青い表紙に金箔で刻まれた題名は、「Ｙｕｕｙａ．Ｈ'ｓ　Ｇｒｏｗｎ－ｕｐ　ｒｅｃｏｒｄ」……。――成長記録ぅ！？

「ちょ、ちょっと待て！　そんなものがあるなんて俺は聞いてないぞ！？　大体、俺は写真が嫌いで――」
「はい。ですので、こっそり草葉の影に隠れて撮影しました」

いけしゃあしゃあと言ってくれる。
このメイド、それくらいやりかねないから質が悪い。……いや、黒幕は姉さんか？　などと苦し紛れに背後関係に想像の手を伸ばしている間にも、事態は刻一刻と進む。

「あの、見せてもらっていいんですか……？」
「ええ、もちろんです若奥様」
「ぁ、あぅ……」

おずおずとエイミーに願い出たフェイトが、地雷を踏み抜いて自爆した。
すると、今のやり取りを契機にしてか、お嬢さん方がエイミーに近寄っていく。
マズい……！　どんな写真が載ってるのかは知らないが、コイツらに見られたら碌なことにならないのは目に見えているッ！！

「ちょっ、待て！　――のわっ！？」

エイミーからアルバムを奪おうと腰を上げるた瞬間、俺は何かに躓いて、前のめりの形で盛大に転倒。胸を強く打って一瞬息が詰まる。鍛えていても、痛いものは痛いのだ。

不自然な自分の有様を不審に思い見やれば、身体を何重にも拘束する銀と金の光の輪――バインドか！？

「攸夜君はそこでちょっと寝ててな」

「ごめんね、私も読んでみたいから……」

見上げれば、すまなそうに手を合わせるなのはと悪びれた様子も見せないはやて。その横をアリサとすずかが抜けていく。

そして――

「えっと……」

視線が紅い瞳とかち合う、が、すぐに逸らされた。フェイト……お前もか。いや、拘束魔法の魔力光を見れば一目瞭然なんだが。

昨夜、昔の写真でイジり倒した仕返しなんだな。そうなんだな？

「……もう、勝手にしてくれ」

「うんっ」

もう何を言っても無駄そうなので、俺は大人しく簀巻きになっていることにした。無理矢理破るのは簡単だけど、物騒だし。

決して日和ったのではないと、強く主張しておく。

＊　＊　＊

芋虫のようにうつ伏せで床に転がった俺。目線の先には、アルバムを囲んで盛り上がる女性陣。

時折、フェイトが心配そうにチラチラこちらを窺っているのが印象的だ。そんなにすまなそうにするなら最初から荷担するなよ。

ん？　なのはがアルバムを持って近づいてくる。俺の話でも聞き

たいのか。

「ねえ、攸夜くん、この男のひとは誰？」

写真に写るのは、見覚えのある教室で俺と眼鏡の優男が何やら会話をしている姿。明らかな隠し撮りである。

「ウチの担任、まほうせんせいだな」

「まほうせんせい……？　担任の先生にしては若すぎじゃないかな」

「１８歳だったかな、確か」

「じゅうはちっ！？　それって法律とか、だいじょうぶなの？」

「１０歳児よりは遥かにマシだろ。それに、今のは時空管理局の局員から出るセリフじゃないな」

「うっ……」

言葉に詰まるなのは。自覚はあったのか、意外だ。

続いてフェイト。近くの写真に、俺と一緒に写ったネコミミっぽい帽子をかぶる女の子を指差す。

「じゃあこの子は？」

「にゃふぅ」

「にゃふぅ？」

「東雲摩耶、通称にゃふぅ。同級生で、悪い娘じゃないんだけどちょっと変わってててね」

有り体に言うとみそっかすにされてる。

そういう時、取り繕うように笑う姿がなんとなくフェイトに重なって、それとなく気にかけてた。まあ、何を勘違いしたのか露出狂に〈グランブルー〉で押し流されたりもしたんだが。……アイツ、元気にしてるかな？

「ふーん……」
「なんだ？　焼き餅でも焼いてるのか？」
図星だったようで、フェイトは目をまんまると見開いたあと、ぷいっとそっぽを向いた。図星か。
他にも、“謎の美少女”に“地味系忍者”、“秋葉原のカリスマ”とそのヨメ。それから、“新米錬金術師”に“リンカイザー”などなど――事件で共闘したり、敵対したり、平時で出会った人物もいる。まあ、彼らとの絡みについてはいずれ語る機会もあるだろう。
小学生の頃のものから、アル＝シャイマールとしての初陣の写真まであった。確かに「成長記録」と題されるだけのことはあるけど、こんなものどうやって撮ったんだ？
「なんや攸夜君、交友関係広いんやなぁ。ちょっと意外やな」
呆れ顔ではやてが言う。
「意外とはなんだ意外とは。人の心はコミュニティによって満ちるんだよ」
「それどこのながっぱなや」
「冗談はともかく、俺は快楽主義者だからね。不幸を気取って他人を拒絶するより、みんなで仲良く騒いだ方が楽しいじゃないか」
フェイトとなのはがハッとしたように息を飲む。フェイトは別にしても、なのはにまで心当たりがあるとは思わなかったが。
しんみりとした微妙な空気が漂う。このイヤな雰囲気、俺の仕業だというのは明白だ。
「えっと……あ！　ねえ、攸夜君、この写真に写ってるのってアメ

リカのグランドキャニオンだよね？」
「ん、そうだな」
「なんでまたアメリカなんかに行ったのよ？」
空気を変えるすずかのアシストに、これ幸いとアリサが話題に乗ってきた。
「前にすずかから料理の本をもらったろ？　あれ読んで実際に作ってみたんだけど、なかなか納得のいく味に辿り着けなくてさ。仕方ないから本場の味を確かめに行ったんだよ」
実際に食べて見なきゃわからないだろ？　と問いかける。
コクコクと頷く傍聴者たち。俺はそれに満足して、エイミーの淹れてくれた紅茶――ダージリンだった――で喉を軽く潤す。
「そうやって各地を回ってるうちに、旅行するのが楽しくなってきてさ。あの手この手で時間を作って世界各国津々浦々、いろんなところに行ったな……」
ただ吹く風に任せ、当てもなくあちこちを放浪していた頃に思いを馳せる。
――陽炎揺らめく灼熱のサハラ砂漠。
――身体の芯から凍えるような南極大陸。
――旅先で訪れた異国情緒溢れる街々、風光明媚な田舎町、茜色に染まった地中海の海。
――広大で雄大なアフリカの大自然。
その一つ一つから受けた感動を呼び起こし、言葉に紡ぐ。フェイトたちは俺の話を熱心に聞いてくれている。
いわゆる世界遺産なんかもいろいろ回った。マチュピチュ、リア・ファル、ストーンヘンジにパルテノン神殿とかもな。まあ、こっち

は“お仕事”の下見も兼ねてだけど。
気付いたら紛争地域を縦断していたり、アマゾンで何日も彷徨う羽目になったことも今ではいい思い出だ。おかげで大抵のものは選り好みせず食えるようになったし、サバイバルな知識も実体験でかなり身についてしまったように思う。野宿に慣れているのはこの所為である。
――――世界中を旅して、見て聞いて感じたことは確実に俺の中で息づいている。
佳いこと、美しいことばかりじゃない。悪いこと、醜いこともたくさん見てきた。けれど、だからこそ“世界”というものを強く認識出来るようになった。知識として知るのと実際に自分の目で見るのとでは、大きな隔たりがあるのだから。

「じゃあ、ユーヤって旅行が趣味なんだね」
「趣味と言えば趣味かな。今は管理世界を巡ることにも興味があるしね。……いつか一緒にいろいろなところに行こうな、フェイト」
「うんっ」

満面の笑顔を咲かせるフェイトの頭を軽く撫でてやる。くすぐったそうに目を細めてかわいらしい。
いちゃいちゃ、いちゃいちゃ。不愉快そうな視線をチクチク感じるけど知ったことじゃない。

「特にローマには一緒に行きたいなぁ。真実の口とか、トレビの泉とか」
「……攸夜君がなにをしたいのかわかったような気がする」
「私もや。手を突っ込んで――、ってやつやろ？」
「ベタね、ベタすぎるわ」

フェイト、なのはがはてなマークを頭上に飛ばして顔を見合わせ

た。残りの三人は意図を察してくれたようだ。
お前たち、仕事に熱心なのはいいがもう少し文化的なことも嗜め。あれは古典だが名作だぞ？

「うんまぁ、攸夜君が人生をすごーく楽しんでるんはよぉわかったわ」
「だろ？」

はやてのまとめ。さすが核心を突く観察眼に洞察力だと感心する。せっかくの“人生”、楽しまなきゃ損だものな。
ちょうどそこで昼休みの終了を告げるチャイムが鳴り、ひとまずこの場はお開きとなった。
――どうやら、俺の試練はまだまだ終わりそうにないようだが。

しーん3-5　【新暦71年】

「やっと着いたな」
「予定だともう少し早くつくはずだったんだよ。……ユーヤが道、何度も間違えるから」
「……。――マジごめん」

夕刻。もうすぐ宵の口を迎える頃。
フェイトを引き連れ、遠見市のとある高層マンションの最上階――仮の住処となる一室の前に辿り着いた。
俺たちの手には、夕食となるべく買い揃えられた食材が詰まったナイロン製の買い物用バッグ。今晩は俺の好きにしていい、ということなので純和風の献立にするつもりだ。
道すがら聞いた話によると、ここはジュエルシードの一件の頃にフェイトが間借りしていた部屋らしい。「偶然だねー」と彼女はのほほんと語っていたが、察するに姉さんは最初から知っていてわざわざ選んだのだろう。俺もそうだが、あの人はこういう細かい演出が好きなところがあるから。
伊達と酔狂が裏界魔王の華である。

「ただいまー……ここに来るの初めてだけどなー」
「おじゃまします」

高級マンションらしく、エントランスにしては広々とした廊下に、俺の間の抜けた声とフェイトの礼儀正しい挨拶が響く。
放課後、調子に乗った若干二名――黄色いきつねと茶色のたぬき

に捕まってこってり絞られた俺。ご丁寧にもなのはの実家、翠屋にてである。そこには当然、なのはの家族もいるわけで……あとは予定調和のようにお決まりのパターンでいろいろと吐かされた。
ついでにお代をまるっとおごりらされたし。ま、久しぶりに翠屋の味を存分に堪能できたからイーブンだけどな。ザッハトルテ、旨かった。
――そういえば、桃子さんが、最近なのはの様子がおかしいと漏らしてたっけ。「なにか知らない？」と訊かれたが、心当たりが多すぎるので当たり障りのない受け答えではぐらかしておいた。
ベルと殴り合ったダメージはまだ抜けきってないらしいし、戦闘の際に交わされた言葉の内容を俺は知らない。ただなんとなく、なのはは“魔法”を避けているように見える。……大きなお世話かもしれないが、一度腹を割って話してみる必要があるかもな。

「お帰りなさい、攸くん。いらっしゃい、フェイトさん」

俺たちの声を受け、紅いカーディガンをストール代わりに羽織った姉さん――幼女モードではなかった――が、優雅な微笑を浮かべて出迎えてくれた。
すぐ後ろには、先に到着していたらしいエイミーが澄まし顔で付き従っている。如才ないヤツだよ、まったく。

「ただいま、姉さん」
「お、おじゃまします。えと……」
「ルーさん、でいいわよ。昔みたいに、ね？」
「あ、はい、ルーさん」

どこか恐縮した様子のフェイトに、姉さんが苦笑混じりに言う。つい先日、ルー＝サイファーとして一戦やらかした後だから萎縮するのもわからなくはない、のか？　それにしたって動揺しすぎだと

も思うがな。

＊　＊　＊

姉さんの招きで上がったリビングはフェイトの家にも見劣りしない広さだ。相変わらず、家具や調度品はアンティーク調のもので統一されている。姉さん、貴族趣味だからなぁ。

でだ、月衣の中に詰め込んでいた私物――プラモとかゲーム、それから本全般――を自室に置き、満を持してフェイトと一緒に夕飯の準備、二人でキッチンシンクに並んで調理した。

「家庭科の成績がいい」となのはが言っていただけのことはあり、フェイトの手付きは危なげない。いささか段取りが悪いような気もしたけど、及第点は余裕で越えていると思う。

「本当に料理の腕を上げたんだな。たいしたもんだ」

「うん、ありがとう。……きっと、覚えてなくてもユーヤに食べてもらいたかったからだよ」

「嬉しいことを言ってくれるね。これならいつでもお嫁に来れるかな？」

「も、もうっ、恥ずかしくなるからそういうこと言わないでよっ」

「ははっ、ごめんごめん」

このようにじゃれあいつつ調理された夕飯は会心の出来だった。フェイトと一緒に作ったからかもな。

その味は姉さんにも好評だったらしく、近年稀に見る上機嫌さで食べてくれた。これだから料理はやめられない。

……ただ、食事の席でもフェイトの表情はどこか陰りが見えて。居心地が悪そうに――いや、思い悩んだようなその様子がひどく気にかかった。

＊　＊　＊

食後、時計の短針が９時を指した頃。
風呂で一日の汗を流し、ようやく訪れたまったりできる怠惰な時間。しかし俺は、趣のあるＬ字型の大きなソファの上で胡座をかいて読書――というか、勉学に勤しんでいた。
フェイトは俺から少し離れた場所にちょこんと座って、牛乳プリンを一口一口噛み締めるように味わっている。ほんと、幸せそうにものを食べる娘だ。見てるこっちまで幸せな気分になってくるよ。
なお、姉さんとエイミーは自室に退がっている。「ごゆっくり」と意味深な笑みを残して。
何がごゆっくり、だ。

「……」

時折、こちらをチラチラと窺うフェイトを視界の隅に納めつつ、ミッドで買い求めた分厚い政治関連の専門書に目を通す。反芻するように、何度も。
昔、姉さんにも言われたことだけど、俺は俺が思っているよりもずっと頭の出来が悪いから、しつこいくらいに勉強しなきゃな。

「ユーヤ……」
「うん？」

視線を本から上げる。
声の主、フェイトは何やらもじもじして遠慮がちにこちらを見つめている。どうやらプリンは食べきったらしい。
専門書にしおりを挟んでソファに置いてから、「どうした？」と努めて優しい声色で問い返した。

「あの……、あのね、そっちに行っても、いい？」
「あぁもちろん。おいで」

微笑んで手招きすると、フェイトは嬉しそうに近寄ってきた。すとんと横に腰を落ち着けて、少し躊躇ったあと遠慮気味に俺の腕に自分の腕を絡める。

「遠慮なんかしなくていいのに」
「うん、ありがとう……。でもね、ユーヤ、勉強してたでしょ？だから邪魔しちゃだめかなって」
「そうか……優しいな、フェイトは」

言って、高級なシルクを思わせる柔らかな髪を撫でてやる。フェイトは「やさしいだなんて……、そんなことないよ」と薄く頬を染めて謙遜する。あれか、これが世に言うナデポか。初めて見たぜ。
ぐりぐり。なでなで。
手触りのいい艶やかな金髪を存分に楽しむ。フェイトもなされるがまま「ん～」と気持ちよさそうに目を細めている。

「……私の髪、撫でるの好き？」
「そうだな、フェイトの髪はいい匂いがするし、サラサラしてて気持ちがいいからね。触られるのは嫌？」
「ううん。私もユーヤに触れてもらうの好き、かな」

あれ？　何か、空気が……。

「ねぇ、ユーヤ」
「な、何かな？」
「……髪を触るって、とくべつなこと、だよね……？」

ルビーの瞳を潤ませ、フェイトが俺の胸に体重を預けるようにしてしなだれかかってくる。少しはだけた襟元から覗く白い肌は今や桜色に上気してひどく艶っぽい。
女の子特有の甘いフローラルな香りが鼻孔をくすぐる。

（――！！）

パリン、と何かが欠けたたような音が聞こえた。
一瞬意識を飛ばしていた俺は、フェイトをギュッと思いっきり抱き締めていた。

「んっ……」

女性的で、少し筋肉質で、だけどふかふかで優しい匂い。
同い年には到底思えないフェイトの色香――たぶん天然――に、心中穏やかでない俺だったが、わずかに残った理性をかき集めて何とかそこで踏みとどまった。我ながらよく頑張ったと思うよ、うん。
脳内の片隅で、薄紫の髪の幼女が「ほらっ、チャンスだよ！　押し倒しちゃえ！」と無責任なことを抜かしたような気がしたが、無視を決め込んだ。
以前、劣情――かどうかは今でも定かじゃないが――に任せてフェイトを押し倒してしまった記憶は痛恨だった。今もたまに思い出して、自己嫌悪に悶絶するくらいには。
だから、当分の間は自制して、一線を越えない――“穢さない”と決めている。だけど同時に、この娘を穢していいのは俺だけだという強い征服欲があることも否定しない。自己矛盾だな。
リンディさんに言ったのはただの言い訳。自分でも逃げているということは理解しているけれども、こればっかりはどうしようもない。感情はロジックじゃないのだから。

「ユーヤ……？」

気がつくと、フェイトが小首を傾げてこちらを見上げていた。どうやら無言だった所為で、心配させてしまったみたいだ。

――まったく度し難い愚か者だ、俺は。

「何でもないよ」

内心の自嘲を押し隠して、金色の髪に軽く口付けた。

「ふぁ……」

フェイトがくすぐったそうに身をよじる。少し不満そうな雰囲気も感じるが、概ね満足してくれたみたいだ。

同時に、心底白けた顔をして「ヘタレー」と罵る幼女の姿を幻視した。ヘタレで悪ぅございましたねっ！

ぐりぐりとおでこを俺の胸に押しつけ、じゃれつく黄色いわんこ。いくらか精神も落ち着いたので余裕を持って後頭部を撫でていると、わんこはソファに置きっぱなしだった本に目をつけた。

さすがは執務官殿。目敏いな。

「……“次元世界関係論”？　外交関連の論述書、それもミッドチルダのだよね」

「ああ、ちょっと“お仕事”に必要だから勉強してたんだ」

「外交官、目指してるの？」

「そういうわけじゃないんだけどね。ただ、必要なら資格も取るかもしれないな」

俺は、この“世界”から冥魔を駆逐しきったとは思っていない。遠くない未来、奴らは再び現世に姿を現すだろう。ここに巣くった

冥魔の元凶たる存在は、そういう性質を持っているのだ。まったく忌々しいことこの上ない。
冥魔の跳梁跋扈を防ぎ、そして俺の野望――ということにしておく――を成し遂げるため、いくつかのプロジェクトとオプションを推進させている。今のところは極秘裏にだが、いつか俺自身が表舞台で活動する必要に迫られる状況が必ず来るはずだ。
そのための予習というわけである。単に教養を深めるという意味でも無駄にはならないしな。

「そうなんだ、すごいね。……でも――」
「でも？」

楽しそうにしていたフェイトは一転、眉を落とす。どこか悲しみを湛えた表情。胸の奥に鈍痛が走るのを感じた。

「あなたがなにをしてるのか、なにをしたいのか――、ちゃんと話してほしいなって。私、ユーヤのこと、もっと知りたい」

頬に白魚のような指先がそっと触れる。
「だって私……、ユーヤのカノジョ、だもん」フェイトが愛らしくはにかんだ。
俺は、自分の手を“カノジョ”の手に重ねた。

「フェイト……。君の言う通りだ、ごめん。今は無理だけど、時が来たら必ず話すから――、フェイトの彼氏としてね」
「うん、信じてる」

無邪気で、あどけない笑顔。
誰よりも大切で、大好きな少女が曇りのない全幅の信頼を向けてくれる。

それが何よりも嬉しい。
どんな高価なものよりも尊い、強くて儚い、愛するひとの笑顔を護っていたい。いつまででも見ていたい。きっとそれが俺の原風景。最も純粋な、混じりっけのない欲望だ。
けれども、ただ独りでは何も叶えるなんて出来ない。ただの暴力では笑顔になんて創れない。
だから俺は求めた。暴力ではない“力”を。
そして今、それはここにある。
――彼女は言った。「あなたなら、ぜんぶの人たちを救うことだってできるはずだよ」と。
ならば救ってみせよう、俺なりのやり方で。
飽くなき欲望を満たすため、何よりも愛するひとのため。
この“力”で俺は、全てのヒトを――――

「フェイト？」
「すー……、すー……」

考え事をしてる間に、我が愛しのお姫様は、くぅくぅと気持ちよさそうに寝息をたてていた。安心しきった、幸せそうな寝顔はまるで子どものようだ。昼間、はしゃぎ疲れてしまったのかもしれない。
……そんな顔されたら、起こすに起こせないじゃないか。

「おやすみ、フェイト。――愛してるよ」

起こさないように囁いて、もう一度髪にキスをする。
あと少しだけ、このまま恋人の温もりを味わうとしよう。
――――全てのヒトを笑顔に。そして、“世界”の全てをやさしく暖かいところに。
それが君の想いに報いることになると思うから。

しーん4-1　【新暦71年】

――夏。

夏と言えば、海。そう海である。

白い砂浜、青い海原、天空から燦々と降り注ぐ太陽光線……そして何より水着。女の子の水着である。

もはやお約束を通り越して、古典芸能の域に達しているイベントだといえよう。

故に、スルーなどあり得ないだろう、常識的に考えて。

「あ”ーー、空が青くて綺麗だなぁ……」

澄み渡った青い空が視界いっぱいに広がっている。ギラギラと照りつける太陽は忌々しいほど。

熱くて頭が溶けそうだ。このまま放置されれば日射病になりかねまい。

しかし、我が身は動かない。

何故なら首から下が砂の中に埋まっているから。

寝そべってるんじゃなく、文字通り埋まっている。これではさすがに抜け出せない。いや、力づくならよゆーだけど。

「あちー……」

ジリジリと天頂で痛いほどの日差しが不意に遮られた。

影を作り出した主は、羞花閉月の女神。垂れ下がる金砂の髪を耳元で掻き上げる仕草がひどく艶やかだ。

「だいじょうぶ、ユーヤ？」

黒い紐で吊った白いセパレートのビキニが、シミ一つない白く透き通る肌を慎ましやかに隠している。決して生地の面積が少なすぎるわけじゃない。すらりとした長身、美しいラインを描く豊かな胸、絶妙にくびれた腰、引き締まった太股、キュッと細い足首――芸術品とも言えるプロポーションを誇る肢体が、あまりにも肉感に溢れているだけ。薄く汗ばんだ玉の肌と相まって、破壊的に艶めかしい。

露出は少ない方が好み――そんな些末事など、一瞬にして彼方に吹き飛ぶほど彼女は綺麗だった。

「ああ――、フェイトの方がもっと綺麗だ」

「～～っっ！？　あ、あり、ありがと……」

きらきらと光るような――事実、ブロンドが日の光を反射して黄金に輝いている――美少女がたおやかにはにかむ。

この、まるで淑やかな白百合の笑顔が見れただけで、今までの苦労が報われた気がした。

まさに男子の本懐っっ――とまあ、感無量な気持ちはさておき、だ。

「、ここから引っ張り出してくれない？」

しーん4　「とある魔法使いと魔導師の休日」

時は7月下旬。処は日本某所のとあるビーチ。
ほど近いいくつかのロッジを貸し切っての夏合宿――もとい、バカンスである。
7月下旬と言えば世間様は夏休み真っ最中。全国の学生たちが待ちに待った夏の長期休暇、現役女子中学生であるフェイトたちも当然、休暇の真っ只中――で、どうするのかと話を聞いてみたらどうだ、今まで管理局の仕事で潰れてしまうことがほとんどだったと言うじゃないか。学生にはあるまじき非常識な回答に、表情筋が引きつったのを覚えている。
いくら時空管理局が人手不足で忙しいからって、十代の若い青春をそんなことに費やすとは何事かと軽く説教を垂れ、あらゆる手段――主に裏工作と袖の下――を尽くして身内全員のスケジュールを確保し。計画立案折衝その他諸々を整えて、この小旅行をセッティングしたというわけだ。
ま、俺自身に邪な思惑があったことも否定しないがな。
ユーノやクロノさんから「仕事が忙しい」という抗議の声が上がったが、「気になる娘の水着を見れるまたとないチャンスだけど？」と一言言ってやったら主張を転じた。わかりやすくて助かります。
女性陣は初めからみんな概ね賛同してくれて、特にフェイトはかなり乗り気だった。どうも前々からこういうことをしたかったらしい。

「天気、晴れてよかったね」
「ああ、海に来たのに曇り空なんて最悪だもんな」

砂まみれの青いアロハシャツを羽織直し、浜辺に敷いたレジャーシートにだらりと足を伸ばして腰を落ち着ける。すっかり慣れた様子で隣に女の子座りするフェイトにオレンジジュースのプルタップを開け、手渡す。
クーラーボックスから持ち出したそれは冷えてキンキンだ。

「ありがとう」

自分のコーラも同様に開ける。プシッ、と炭酸の抜けた音が夏らしく爽やかで。

「海、きれいだね。海鳴で見るのとはぜんぜん違う……」
「一応、南国だからな。さすがに向こうとは違うさ」
「うん。……連れてきてくれて、ありがとね」
「どう致しまして」

この何とも言えない雰囲気を助長するべく、フェイトの腰に手を回して引き寄せる。彼女は頬を薄く紅潮させるが、嫌がる素振りもなく俺の肩に頭を預けた。
はぁ……顔、ちっちゃいなぁ。
さざめく潮騒、遊びに興じる黄色い声――と、不意にフェイトは眉をわずかにひそめた。

「ユーヤの身体、傷がたくさん……」
「ん、あぁこれ？　これは戦傷だよ、戦傷。大きいものならともかく、この程度じゃあな」

破壊するのは得意だけど、治癒とか創造は苦手だ。リソースを無駄に食うから、致命傷以外は放置して自然治癒任せ。ま、何せ俺は“魔王”で、なおかつ生き汚いからな。

そんな意味も込めて、心配するなと笑ってみせたのだが、紅玉の瞳には曇りが浮かぶ。

この感情は――悲しみ？

困惑を余所に、フェイトの白魚の指先が塞がって色の変わった傷跡を愛おしそうになぞる。触れるか触れないか、微妙な優しい手つき。だが、しっとりすべらかなの肌の感触を確かに感じて、体温はやにわにボルテージする。

ちょっ、まっ……！？　背筋がゾクゾクするからやめてっ！？

「あ、あー……、ふぇ、フェイトは海で遊ばないのか？」

「うん、遊ぶよ。……でも今は、ユーヤといっしょがいいな」

静かにはにかむ麗しの姫君。頬を薔薇色に染めた表情は愛しくも愛らしい。

「そ、そうか」

「そうだよ、ふふっ」

……っ！　無邪気な微笑みに、鋼を誓った理性が悲鳴を上げる。やっべー、何この娘天然で魔王（おれ）にニコポしてくるんですけどっ！？

これはマジで洒落にならないと即断即決、傷を触れていた彼女の手を強引に取り、指を絡ませた。

一瞬、びっくりしたように目を見開いたフェイトは、すぐにギュッと握り返してくれた。

さすがにここひと月半の間イチャつきっぱなしだったからか、この程度ではドギマギしないらしい。けれどもそうなると、この筆舌

にしがたい美しさに直撃されるわけで。
水着姿の彼女はとても扇情的で、魅力的だ。こんなの他の奴には見せられない――いや、見せたくない。……最近、自分の独占欲や所有欲が人並み以上に強いことを確認した次第だ。
俺が“シャイマール”だからだろうか？　まぁそれを矯正する気など毛頭ないが。
――再び混雑し始めた思考を紛らわせようと、視線を漂わせる。波打ち際で、なのは、アリサ、すずか、はやてとちびっこ――ヴィータがバレーボールに興じていた。あとなんかユーノのヤツもナチュラルに混じっている。
ちなみに、なのはの水着は桃色のシンプルなセパレートビキニ、アリサは、オレンジのビキニトップとショートパンツタイプのボトム。すずかが紺のワンピースタイプで、はやてが黄緑色のパレオスタイル――まぁ悪くないが、フェイトのかわいさに比べれば塵芥だな。……ちびっこの格好？　見た目相応、フリル付きの赤い女児用水着だよ。
で、ユーノは短パンタイプの白い水着とライトグリーンのパーカー。俺の方は、七分丈の青い水着に前述のアロハシャツという出で立ちである。
つーか、肌白いなぁユーノのヤツ。そんなもやしっ子だから女の子みたいだ、ってからかわれるんだぞ？　あとで少し扱いてやるか。
遠泳しているアルフとザフィーラ、シグナム。ビーチパラソルの影で休んでいるクロノさん、エイミィさん、リンディさん。砂の城を建設中のリインフォース姉妹とシャマル――その他の面々もそれぞれ、思い思いの方法で羽を伸ばしている。
余談だが、クロノさんとエイミィさん、来年結婚するそうだ。クロノさんにプロポーズについて相談されたから知っている。フェイトにはまだ内緒、だとか。
とまぁ、夏を満喫する連れの姿に、企画した甲斐があるってもんだと目を細める。じっと見過ぎて、視姦してると勘違いしたフェイ

トに頬をつねられたが。鼻の下なんか伸ばしてないって！

「――しかし、酷い目に遭った。生き埋めに遭うのは二度と御免だな」

「あれはユーヤが悪いんだよ。自業自得だよ」

「あんなのただのイタズラじゃないか」

「ふぅん……ただのイタズラ、ねぇ？」

冷ややかな声をに背を向けば、いつもの腕組みポーズで“ゴゴゴゴゴ……”と効果音とエフォクトを背負った銀髪の魔王。

「げぇっ、ベルっ！？」

「ふん、ご挨拶じゃないの」

俺を生き埋めにした張本人、競泳用の水着を着たベール・ゼファーだった。

その経緯はこうだ。

姉さんとエイミーは元々来る予定だったのだが、どこから聞きつけたのかベル一味とパールまで参加をねじ込んできたからさあ大変。ルー姉さんだけでも守護騎士連中と折り合いが悪い――これは俺もだが――って言うのに、ベルたちまで揃ったら収拾がつくわけがない。姉さんたちは現地集合にして、移動中にフェイトたちと顔を突き合わせないように配慮したわけだ。

んで、手間がかかった意趣返しに、ちょっとしたいたずらでベルに黒スク――胸の名札に「べる・ふらい」と手書きしてやった――を用意したら、ブチギレた。いや、正確を期すなら文句を言いつつも着てきたので「幼児体型だからよく似合ってるな」と感想を述べたらキレたのだ。

そりゃあもう、久々に命の危険たさ。ん、今着ている水着はどうやら自分の魔力で編み直したものらしいな。

生き埋めにされる間際、「死にさらせええええええっ！！」というドスの利いた声が耳に焼き付いている。……あれ？　なんかドデカい金ぴかハンマーで殴られたような記憶が……。

「光となれ（マルティーク）でも懲りないだなんて、雷神王（ライジンオー）結界をお望み？」

やっぱりお前の仕業か！　――って、おいっ！

「ちょっと待て、それどっちも第一世界（ラース＝フェリア）の魔法じゃねぇか！　お前、空属性ついてないだろっ！？」

「一回こっきりのギャグ時空だからいーのよ」

「いいわけあるかっ！　大体、何でお前らまで来てるんだよ」

「それは……っ、あ、アゼルが、海で遊びたいってうるさいからさ。連れてきてやったのよ」

気まずそうに視線を逸らすベル。その先には、砂の城造り組に参加したアゼルの姿が。例のいろんな意味でアウトな“普段着”で。

というか無駄に上手いな。すごく精巧かつ精密な天守閣が見えるんですけど。

「はぁ……さいで」

それからリオンは木陰で読書。エイミーを伴った姉さんは、デッキチェアに寝そべってカクテルを含んでいる。お、テスラが表に出てきて砂遊び組に合流した。さらなる大作は確定だな、こりゃ。

……うん？　一番のトラブルメーカーが見あたらないな。

「なぁベル、パールは？」

「あそこ」

呆れ顔でベルが顎をやって示すのは、サーフボード型“箒”ライダーブルーに乗って、無邪気にはしゃぐ金色ツインテール。水のマナが豊富なこの海辺ではさぞや飛びやすいことだろう。
おお、なんとも見事なキックバックドロップターン。パールめ、なかなかやるじゃないか。

「なんだか楽しそうだね～」
「何ならフェイトもやってみる？　Ｉ　ｃａｎ'ｔ　ｆｌｙ、ってね」
「えっ？　「私は飛ぶことができません」……？　えっ？」

きょとんとするフェイト。ニヤリと不敵に笑み、俺は立ち上がると月衣の中からお目当てのものを引き出す。
ズズズ……、と空間を割り裂いて現出した白と青のツートンカラーで染められたサーフボード型“箒”の先端が、ざく、と白い砂に刺さった。

「あんたも持ってんのね、ソレ」
「市販の“箒”ならだいたい全種類持ってるのさ」
「あっそ」

興味なさそうにつんと澄ましたベルを一瞥し、座ったままのフェイトに向き直る。

「……？」

俺はまるで騎士のように大仰に膝を突き、永遠の愛を誓った姫君に左手を差し出した。
純潔のお姫様はすぐに意図を呼んでくれ、微笑んで俺の手を取る。

視線が数瞬交差して――

「それじゃ、さっそく行こうか？　せっかく海に来たんだから思いっきり遊ぼうな」

「うんっ！」

溌剌な、大輪の笑顔を咲かせたフェイトを伴って、俺は真っ青な海へと歩を進めた。

しーん4-2　【新暦71年】

疲れ果てるまで遊んだあとは浜辺で夕食のバーベキュー。
準備から調理まで、ほぼ俺ひとりで――主催は客人をもてなす立場なのだから当然だ――用意した肉や野菜の焼き加減を見たり、鉄板で焼きそばを作ったり、カレーをよそってやったりと大忙し。大所帯の上、食い意地の張っている連中が傍若無人に振る舞い、夕食の場はまるで戦場だ。
人数の三倍強は用意していたはずの食料は、遊び疲れた腹ぺこ怪獣の群れに襲われて、その胃袋の中へと瞬く間に消えていく。
原因は知らないが、フェイトとベルとパールが張り合って大食い対決してしたな。
ちなみに大差を付けてベルの勝ち。さすが“暴食”の魔王である。悔しがるフェイトはとてもかわいかった。

＊　＊　＊

さておき、日も落ちきって夜。
男子用に借りた少し小さめのログハウス風ロッジ、そのラウンジにて。
「ところでユウヤ、よくみんなの都合を合わせられたね。いったいどんな手を使ったの？」
俺の持つ四枚のトランプを真剣な眼差しで窺うユーノが言う。
彼の手札は二、対してこちらは四。その上、一枚には自転車に跨

った道化師――つまりジョーカーが入っていた。いささか不利な戦況と言える。まあ、だからこそ燃えるんだが。

「管理局のお偉いさんとは懇意にしてるからさ。それでちょっと交渉して“願い”したんだよ」

ジョーカー持ちだということなど露とも見せず返答。表情はポーカーフェイス、視線だけはあからさますぎるくらいババに向けて。

さんざん悩んだあげく、ユーノは“見せ餌”にまんまと引っかかってくれた。頬がひくつく。

裏を読み過ぎたのが敗因だね、ユーノ君？

「交渉、か」

さも胡散臭いとクロノさんが呟く。一瞬だけ俺に向けた目線は、ユーノのカードに移った。先ほどの様子からユーノの手にジョーカーが移動したのを理解したのだろう、警戒心が見え隠れしている。

「……む」

トランプに興じる最後の一人、ザフィーラも固唾を飲んで動向を観察している。仮にババが引かれた場合、次はザフィーラの番だものな。

「そういった行為を職権乱用、越権行為と言うんだが。……しかし、君の動向は本当に読めないな。そもそも、そこまでコネクションを築いて何を企んでいる？」

「企んでいるなんて人聞きの悪い」

扇状になったユーノの持ち札の上を行ったり来たりする指先。ク

ロノさんの手持ちは四枚、目下最下位だ。
俺が管理局の上層部と繋がっていることは、仲間内では公然の秘密と化している。最高評議会については漏れてないし、もともと隠しちゃいないがな。

「仮にも提督のクロノさんですから、近い内に耳に入るとは思いますけどね。――まあ、一言で説明するなら……人手不足の解消、かな？」
「人手不足の解消？　そういえば、近頃開発局がデスマーチを敢行していると噂で聞いたが」

言いながら、クロノさんがカードを引く。すると、呆れ顔がやにわに固まった。文字通り、面白いくらいに表情がフリーズしている。
……ふむ、ババを引いたか。

「次は俺か」

空気を察したザフィーラが、渋い声を発する。眉間に皺を寄せ、厳つい顔を歪めた。こう、マッシブで男らしい感じは憧れるよな。
ふと外に人気を感じて、視線を送る。紺色の夜闇の奥に茶色のサイドテールが踊るのが見えた。あれは……なのはか？
なのはらしき人影は、そのまま海の方に歩いていく。アイツはフェイトたちと一緒に女子用の大きいロッジ――レンガ造りの豪華なもの――に宿泊しているはずだ。ちなみに、姉さんたちはそれぞれ自分の月匣に引っ込んでもらっている。混ぜるな危険が多すぎるための苦肉の策だ。
しかし、夜更けというにはまだ浅い時間だが、年頃の少女がひとりで出歩くというのはいささか具合が悪い。
それに――――

「ユウヤ、君の番だよ？」
「悪い、俺ちょっと抜けるわ」
返答を待たず、俺は席を立つ。足早に外へと繋がる両開きのドアに近寄り、ドアノブを捻る。
「え、ちょっ、ユウヤ！？」ユーノの戸惑いの声が背後で聞こえた。

＊　＊　＊

砂浜。頭上では、邪魔をする人工の光源がない澄み切った濃紺色の空に散りばめられた無数の星々が、存分に輝きを誇っている。
満天の星空はサバンナで見上げたそれにどこか似通っていた。
白い砂に足跡を残し、俺は体育座りをしているらしいサイドテールの少女に近寄る。気配は消して、足取りは自然に。

「なのは」
「ふにゃあっ！？　――って、攸夜くん？」
「おう。隣、いいか？」
「あ、うん」
お許しが出たので隣に腰を落とす。片足を軽く投げ出した緩い格好でだ。
「どうして、攸夜くんが？」
「なのはが出て行くのを見たんだ。こんな時間に女の子の一人歩きは感心しないな」
「そう、だね……」
沈黙。
あまり気持ちのいい性質のものじゃないが、黙って聞き手に回る

ことを選ぶ。きっと、ここが“彼女”のターニングポイントになると思ったから。
煌めく星を見上げ、気まずい間を潰す。
なのはが突然、「あっ」と声を上げた。

「ねえ、攸夜くん。こうやってふたりだけでお話するの、はじめてじゃない？」
「そうだっけ？」
「そうだよ。だってあのころは、いつも誰かといっしょだったもん。……学校だとアリサちゃんとすずかちゃん、ジュエルシードを探しているときはユーノくん」

彼女は当時のことを思い返したように、クスクスと楽しげに語る。あの無邪気でいられた頃を思い出しているのかもしれない。

「それに、フェイトちゃんが来たあとなんて、攸夜くんずーっとフェイトちゃんにつきっきりだったし？」
「……悪いかよ」
「ううん、悪くないよ。……あのころからフェイトちゃんのこと、好きだったの？」
「まあ、な。一目惚れだった」
「そっか、やっぱりそうなんだ。昔から美人さんだったもんね、フェイトちゃん」

図星を突かれて顔が熱を持つ。暗がりのおかげでなのはには気づかれないだろうが。
にこりと小さな、包み込むような笑み。なのはのこういうところは本当に変わってない。昔のままだ。
……。一拍置いて、俺は秘書官代わりを務める“知恵者”から受けたとある報告について切り出す。

「教導隊、除隊したんだってな」
「……うん」

途端に、なのはの表情に陰りが差した。まるで仰ぐべき太陽を失った向日葵のように。
なのはが受けたのは、正確には不名誉除隊――有り体に言えば処分だ。
謹慎中の無断出撃、および戦闘行為、それは確かに処分されて然るべき行いだった。組織の規律に例外はない。時空管理局という巨大すぎる機構を運営する上でならば尚更である。

「あのね……私、管理局のお仕事、しばらく……、高校を卒業するまでお休みしようと思うんだ」

絞り出すような声。その内容は、意外なものではなかった。

「休職？」
「……うん。リンディさんとクロノくんと、それからレイジングハートに相談して、決めたの」
「どうしてか、理由を聞いてもいいか？」

こくん、と肯定の頷き。無言で続きを促す。

「きっかけはベル……さんにね、言われたこと。私が、殺す覚悟も死ぬ覚悟もない、分不相応な力を手に入れて粋がってる小娘だって」
「職務理念的に警官に準ずる管理局員に、殺す覚悟なんて的外れな指摘だろ？　そんなもの、ベルの戯言じゃないか」
「そうだね。そうなんだけど……でも、私個人として、魔導師として――“魔法”を使うひととして、“殺してしまうかもしれない”

って考えることは、たぶん必要だよ」

言葉の意図が読めず、思わず怪訝な表情をしてしまった。

だがなのはは俺の態度に嫌な顔一つせず、言葉を続ける。

「ヒトって、簡単に死んじゃうんだよね。それが魔法だったらなおさらで……知ってた？　非殺傷魔法だって、当たりどころが悪かったら命を奪っちゃうことだってあるんだよ？」

それは実体験か、それとも教導官としての知識か――たぶん後者だろうな。でなければ、こんなに無垢ではいられない。

「知ってるつもりだった。頭ではわかってるつもりだった。自分がしてることは、命のやりとりなんだって」

悲痛な独白が訥々と続く。

「……管理局のお仕事をお休みする、ってお母さんとお父さん……家族に打ち明けたときね……、泣かれちゃった。私が決めたことだから今までなにも言わなかったけど、ほんとうはすごく心配だったんだ、って。そんな心配かけてたなんて、私知らなかった……。

バカだよね。一度大けがしたのに、ぜんぜんわかってなかった。ユーノくんを傷つけるまで、わかってなかった……ほんと、バカだよ」

膝をギュッと抱えたなのはの姿は、普段よりもずっと小さく見えた。

「だからね、少しの間“魔法”から離れてみて、自分とかいろんなことを見つめ直してみようって思うんだ。

いまでも、空を飛ぶことも、帰ってくる場所のことも好きだけど――そんな独りよがりな理由じゃなくって、もっとちゃんとした“戦う理由”、見つけたいから」

戦う理由、か――なのはには、ちゃんと初めからあると思うんだけどな。いや、見失ってしまったのかもしれない。

しかし、コイツは――

「なのは」

「えっ？」

まるでこの世の終わりを見たような顔をする幼なじみに、デコピンを食らわせてやった。魔力強化したキツーい奴を、だ。

「い、いきなりなにするの～っ！？」

涙目を白黒させるなのは。真っ赤になったおでこをさすっている。俺から庇っているだけかもしれないが。

微笑ましい仕草だとも思いつつ、呆れた風を装ってため息を吐く。

「なのは、お前はいちいち生き急ぎ過ぎなんだよ」

「生き急ぎ、すぎ？」

「俺たちは今いくつだ？　１５、そう１５歳だ。まだ２０年と生きてない半人前のガキだよ」

「それは……そうだけど」

俺の言に不服そうな顔をするなのは。子ども、半人前と評されて気に食わないのかもしれない。

「そういうリアクションするところが子どもだって言ってるんだ。

――いいか、なのは。お前が今までずっと突っ走ってきたこと、それはたいしたもんだと思う。尊敬するよ」

投げ出していた脚に力を込めて、立ち上がる。

パンパンとついた砂を払い、ポケットに両手を突っ込む。それから、満天の星を仰ぎ見た。

「だけど、だからこそ、今は休むべきじゃないのか？　時々立ち止まって、振り返って、何かに躓いて、たまには道草食ったりして……それが人生ってもんだろ？　生きることに解答はないし、近道もない。一歩一歩、確実に堅実に進むしかないんだよ、きっと」

星空から視線を外し、なのはを見やる。

膝の間に顔を埋めた彼女は、俺を見上げると困ったように作り笑いを浮かべた。俺の話にピンと来ていないのだろう。

「むずかしい、ね……」

「難しいよ。けどな、無理に正解を求めようとするから間違うんだ。だから、気負ったりしないでゆっくり考えろ。時間は無限じゃないけど、少なくとも俺たちにはたくさんあるんだからさ」

なんか説教みたいで決まりが悪いな……言いたいことが伝わっていればいいんだけど。

ふと遠くから声が聞こえる。「なのはー！　どこー！？　返事してー！」わずかに焦りを帯びた声の主は――フェイト。きっと、姿の見えない親友を心配して飛び出してきたのだろう。

「……我らがお姫様のお呼びだ。そろそろ戻ろうか」

「そうだね。……フェイトちゃんがお姫さまなら、私はなにになるのかな？」

「なのはなんてお節介な妖精で十分だ。あるいは喋るオウムな」
「ちょっと、それってどういう意味なのかお話聞きたいなー。――って、あっ、待ってよー」

むくれるなのはをほっといて、足を踏み出す。有り体に言えばとんずらである。
ぷんすか怒れるイノシシ娘に構っていたら大けがをしてしまう。ま、結果的には明るくなったみたいでよかったのかもな。
なのはなら、きっと大丈夫。
今は迷っているかもしれない。けれど、いつか必ず“答え”を掴む日が来るはずだ。
――――何せなのはには、どんなことにも挫けない“不屈の心”が宿っているのだから。

しーん4‐3　【新暦71年】

祭り囃子の太鼓の音。ドンドンカラカラドンカララ、小気味いいリズムが提灯の光に照らされた夜闇に響く。
いくつもの露天が軒を連ね、店主が活気のいい文句でお客を呼び込む。小遣い片手に目当ての出店へと走る子どもたちの姿が微笑ましい。
ここ、臨海公園で開催された夏祭りには、海鳴市で最大級の規模とあって市内各地から集まった人々で溢れかえっていた。
“袖”の中に左腕を仕舞い込み、にぎやかな喧噪を眺める。残った右手は顎をさすってみたりして気分は雅な浪人風だ。
やはり祭りはいいなー、ワクワクする。この独特な高揚感、他のことではなかなか味わえない。思わず高笑いしたくなる――っとと、いかんな、日本人の血が滾りすぎて変なスイッチが入りそうだ。

「遅いね、なのはたち」
「何を言うのかねユーノ君。古今、女の子の準備は時間がかかるんだよ。男は黙って待つもんだ」
「そうなの？」
「そうとも」

ユーノが漏らしたぼやきをピシャリと切り捨て、ダンディズムを布教してやる。コイツ、イマイチ自覚が足りないからな。いろいろと。
かれこれ四半時ほど立ちっぱなしで疲れてるのか、あるいは想い人の晴れ姿を目にするのが待ち遠しいのか。まあ、その気持ちもわ

からなくもないけどさ。

「それにしても、賑やかだね」
「だな」
「こうしてると前に、ユウヤと来たときのことを思い出すなぁ」
「お前さん、よく覚えてるね」
「大事な親友との大切な思い出だからね、当たり前だよ」
「……こっぱずかしいことを真顔で言うんじゃねーよ」
「あはは、照れてる照れてる」

っち、このラブコメ体質め。俺のフラグは、そう簡単には立たせてやらないんだからねっ！

――そんな感じでじゃれ合う俺たちは、どちらも夏祭りの場に相応しく浴衣姿だ。

俺は濃紺無地の着物に枯れ草色の帯、ユーノは端に唐草模様の入った若草色の着物と白い帯の組み合わせ。自分のはもちろん、ユーノの着物を着付けたのも俺だ。浴衣は男女問わず、羽織袴や振り袖の着付けも一通りこなせる自信がある。……女性物の着付け方を覚えた理由が「脱がした着物を直せるように」、というのはここだけの秘密だ。

「んっ、来たみたいだな」
「あ、ほんとだ」

少し遠く、公園の入り口辺りでぶんぶん元気よく手を振る浴衣美少女一号。

ほとんど白に近い薄紅色の生地に、桜の花びらを模した柄が散りばめられた女の子らしい浴衣。帯に鼻緒、小物入れの鮮やかな紅（くれない）が彼女――なのはの溌剌としたかわいさを現しているかのようだ。

彼女の艶姿に当てられたらしいユーノが、表情をデレんデレんに

崩壊させて手を振り返している。

「鼻の下が伸びてるぞ、ユーノ君」

「ええっ！？」

「手で隠すなよ。――しかしいいよなぁ、着物って。はいてない（・・・・・）んだぜ、あれ」

「うん、はいてない（・・・・・）んだよね、あれって。……僕、実はあんなに肌を隠しちゃうのはどうかなってバカにしてたんだけど、案外そうじゃないことを思い知ったよ」

「ユーノは即物的だなぁ。露出が少ないからこそそそるんだろ」

「それは同意できかねるかな。健康的に肌が見えるからいいんじゃない」

眼鏡をクイッと上げ、あまつさえレンズを光らせてまで力説するユーノ。ぬ、この件については後ほど討論を重ねるべきか。

さておき。俺の目当ては当然のごとくなのはの後ろに隠れるようして控えるお嬢さんだ。……隠れる？　何でさ？

カランカランと下駄の音を響かせて、浴衣美少女たちが近づいてきた。

「ごめんね、久しぶりにお着物の着付けしたから手間取っちゃって。……待たせちゃったよね？」

「うん、３０ぷモッ！？」

「いやいや、俺らも今来たところさ」

すまなそうな表情で手を合わせるなのはの謝罪に、素直すぎる返答をしかけたユーノの口を手で塞ぎ、代わりに爽やかな笑顔で返す。不心得者には念話で『余計なこと言うんじゃねーよ』と釘を刺しておいた。

なのはが不思議そうに小首を傾げ、「そうだっ」と振り返る。

「ほらフェイトちゃん」
「う、うん……」

ニコニコ笑顔のなのはに促され、彼女の影からおずおずと進み出る浴衣美少女二号。白い花火の模様が入った藍染の和服に、帯は紅というより朱。小物入れと鼻緒が山吹色という出で立ちは、彼女――フェイトの落ち着いた、それでいて可憐な雰囲気によく合っている。胸が大きいと着物は似合わないというのが通例だけど、この愛らしい娘には当てはまらないらしい。

その中でももっとも目を惹くのは髪型だろう。普段はリボンで先を結っている黄金色の長髪を、今は後頭部でお団子状に纏めている。着物の襟元から白いうなじが露わになってすごく色っぽいぞ。

後に聞いた話だが、この髪型はルー姉さんの入れ知恵だとか。さすがは姉さん、俺の好みを把握してらっしゃる。

「フェイト、どうして隠れてたんだい？」
「だ、だって……！　こういうの、久しぶりだから……」

ユーノの至極真っ当な問いに、フェイトはもじもじと突き合わせた指先をいじり、どもる。軽く紅潮してどこか恥ずかしげだ。

なのはに「そうなのか？」と疑問を投げかけると、彼女から「うん」と苦笑気味に答えが帰ってきた。

「フェイトちゃんがこっちに越してきてはじめての夏以来、かな？　そのあとは、いろいろあったから……」
「……毎度思うが。お前たちは一体どういう学生生活を送ってきたんだ？」

頭痛が痛いので、眉間を親指と人差し指で押さえてみた。「自覚

はしてるよー」となのはがさらに苦笑いを深める。

「ゆ、ユーヤ……？」

「うん？　どうした」

瞳を潤ませ、惚けたような表情で上目遣いに見上げてくるフェイトが、おずおずと俺の名前を呼ぶ。いつものごとく、間延びしたイントネーションで。

「えと……、あのね、私、変じゃない？」

「変？　何がさ」

「私の、格好……」

消え入るようなフェイトの声。格好……つまり、浴衣が似合ってるかどうかを聞きたいのか。

しょうがないな、と内心で独り言ち、俯きがちな彼女の頤おとがいにそっと手を添えて顔を上げさせる。そのまま、怯えの浮かぶ紅玉の鈴を割ったような瞳を、出来る限り真剣な顔でじっと覗き込む。サッと、白い頬が薔薇色に染まった。

「変なところなんてあるもんか。よく似合ってる。浴衣姿の君はすごく綺麗だよ、フェイト」

いつもながら歯が浮くようなセリフだけど、そこに込めた気持ちに嘘はなんてない。それはちゃんとフェイトにも届いたようで、すっかり機嫌を持ち直した彼女はふんわりと嬉しそうに微笑んでくれた。

キスの一つも落としてやりたいところだけど、場所が場所だ。今夜は自重しよう。

しかし、海に行ったときはこんな風じゃなかったのに。……慣れ

ない格好で不安だったのか？　やはりというか、まだまだ精神的に不安定なところが目立つ。真っ直ぐぶれない芯は通っているのに、簡単に折れて潰れてしまう――そんな彼女を支え続けようと、改めて誓う。

かれこれ何度目かの意思表明を終えた俺の目に、ぬぼーっとしている親友の姿が留まった。

『ユーノ、お前もなのはに何か言ってやれ』
『ええっ！？』
『ええっ！？　じゃねーよ。ポイント稼ぐ絶好のチャンスだろ』

ちらりと視線を浴衣美少女一号に向ける。何でか知らないけど、赤面してるね。

『そ、そうか……ユウヤの言うとおりかも』
『シンプルに、思ったことだけを伝えればいいよ。お前さんに気障なセリフは似合わないしさ』
『うん、ありがとう！』
『おう、がんばれよ相棒』

ゴクリと唾を飲み、まるで死刑台に上がる間際のような顔をするユーノ。つーか、女の子を褒めることがそんなに覚悟の要ることか？　息をするように褒めろよ。

「あ、えっと……な、なのはもかわいいひょ」

あーあ、噛んじゃった。ここぞとばかりに噛んじゃったよ。

「あ、あいがと」

なのは、お前もか。
嬉しさとか羞恥とか戸惑いとか――いろいろな感情があべこべで混乱した様子の二人は、耳まで真っ赤にして恥じ入り、俯く。その間には極めて甘酸っぱい、有り体に言えば青春的な空気が漂っていた。
な、なんだこの居たたまれない雰囲気は……っ！？
ああなるほど。これが普段、俺とフェイトの周りにいる奴が味わう気分なのか……。はやてたちがげんなりしていた理由が理解できた気がする。

「初々しいねえ」
「……ああいうのもいいかも」
「ふぅん……フェイトは俺たちのつき合いに不満があるんだ？」
「ち、違うよっ！　ユーヤに不満なんてないもん！」
「はいはい。ほら、ユーノもなのはも固まってないでそろそろ行こうぜ。祭りが俺たちを待っているッ！」
「ギュッとてしてもらうのも、撫でてもらうのも大好きなんだもん！」

おいおい、フェイト。そんな恥ずかしいこと口走っていいのかよ？　――ああ、言わんこっちゃない。周囲の視線を集めちゃって真っ赤になってるじゃないか。
そんなところも、愛しいわけだが。
俺も大概だな。

＊　＊　＊

自爆気味にオーバードライヴした三人も、しばらくしたら落ち着いて。それから俺たちは出店を回ることになった。
道すがら、射的や金魚すくい、型ぬきなどに興じるはやてと愉快

な家族たちに遭遇したり、にやけ顔のアリサとすずかに出会して、あからさまな状況に茶々を入れられたりと些細なハプニングはあったものの、俺たちは夏祭りを大いに楽しんだ。

――今回、いつもの面子にはご遠慮いただいた。

端からはダブルデートに見えるだろうし、俺とフェイトはそのつもりだったから。まあ、ユーノとなのはは変に素直じゃないからデートじゃないと頑なに否定するだろうけどな。

その証拠に、二人の様子はぎこちなさがありありと残るものだった。

ちなみに俺は、フェイトとたこ焼きの食べさせっこなんかをしてたりしてデートを満喫である。

それでも、どこか吹っ切れた様子で無邪気に笑うなのはが印象に残った。本格的に管理局から――“魔法”から距離を置いて、いろいろと心の整理を付け始めたのかもしれない。

「花火、まだかな？」

「もうすぐだから、少し落ち着け」

ベンチに座って夜空を見上げたフェイトが、待ちきれないと瞳をキラキラさせていた。

彼女の傍らに立つ俺は、苦笑してと軽くたしなめる。

まるで親にいたずらを咎められた子どものように、しゅんと眉を伏せるフェイト。頭にちょこんと乗せた狐のお面も心なしか元気がない。

最近、ますますフェイトが子どもっぽくなってきている気がする。今まで気を張って、張り続けて……抑制してきた幼児性、言い換えるなら依存性とでもいうべきものが行動に滲み出しているのかもしれない。

だが、俺はそれを否定しない。

依存したければすればいい。甘えたいなら甘えればいい。――少

なくとも、俺がフェイトの前からいなくなることなんて金輪際あり得ないんだから。
邪魔するもの全てをねじ伏せ、フェイトが望む限り添い遂げる。そう、何だろうが関係ない。俺の、俺たちの行く手を阻むものは何であろうが全て抹殺してでも――思考がやや剣呑な方向に流れかけた時、
――ドンッ！

「わぁ……」

大きな炸裂音と感嘆のため息がそれを現実に引き戻した。
晴れ渡った夏の夜空に咲き乱れる大輪の花々。
大きなもの。小さなもの。
高く打ち上がった“玉”が破裂して、様々な形に“星”が飛散する。そして、生まれる火と光の芸術。
七色の光が創り出す幻想的な光景を、フェイトは目に焼き付けるかのようにじっと見つめている。そしてすぐ隣、微妙な距離を保って座るユーノとなのはも同じように、空を見上げていた。
これでまた打ち解けてくれるといいのだが……。俺とフェイトは、“そういう”機微を一足飛びにすっ飛ばしたからあまり参考にはならないし――

（ま、なるようになるか）

お節介極まりない思考をカット。おめでたい自分の頭の出来に苦笑して、夜空に咲く華に注視する。
金色のしだれた花火が、まるでフェイトの髪みたいだなと、俺は思った。

しーん4-4　【新暦71年】

季節は巡る。夏から秋に。
青々としていた木々の葉が次第に色を変えて鮮やかに染まっていく。深まる紅葉はまるで、一つところに留まらず、移り変わり続ける時の流れを象徴しているかのようで。
季節が巡るように。時が流れるように。
不変でいられるものなど、この世のどこにありはしないのだ。少なくとも、“生き続ける”限りは。
俺も、そして俺の大切な人たちも例外ではない。緩やかに、だが、確実に変わっていく。移ろっていく。
善きところなのか、それとも悪しきところなのか……その行き着く先を、全知全能でないこの身で窺い知ることは出来ないけれども――

＊　＊　＊

清秋の空は高く、絶好の行楽日より。場所は何の変哲もないとある遊園地。とりあえず、ネズミの王国ではないとだけ言っておく。
さて、何故こんなところに来ているのか？　説明するまでもないと思うがでぇとである。
遊園地にはフェイトと一緒に来たかった場所の一つ、ベタと言われようがこれは外せない。フェイトの方も楽しみにしていてくれたらしく、その喜びようは何日も前から手に取るようにわかるほどだった。
ついでにユーノとなのはも誘ってやって、二人の仲を深める後押

しをしてやろうという腹積もりだったのだが……。

「はぁ……」

おどろおどろしい建物――お化け屋敷の前で、茶色のこだぬきが遠い目をしてため息を吐く。

背中に哀愁を背負っているような気がしないでもない。

「なあ……なんで私、ここにおるんかな？」

知るか。

「なあなあ、なんでー？」

絡むな、うぜえ。

「なあなあー」

「あー、鬱陶しいっ！」

はやて（こだぬき）の執拗な追求に耐えきれず怒鳴り声が口をつく。傍らのフェイトがビクリと肩を揺らした。

しかし今日のフェイトもかわいいなぁ。黄色と白の毛糸で編まれたボーダー柄のワンピースと、丈のやや短めなすらりとしたシルエットのジーンズというコーディネートは、スタイルのいい彼女にマッチしている。足元は白いヒールスニーカーだ。

「そんな大声出さんと、周りに迷惑やで攸夜君？」

周囲の行楽客が向ける怪訝な視線に、俺は肩をすくめた。

と、このように、何を血迷ったかはやてまでついて来ている。結

果は見ての通り、あまり楽しめてはいないようだが。
ジェットコースターではどこぞのお人と相乗り、ゴーカートでは一人寂しく――実際にはお着きが“二人”居るが――ドライブ、そしてここお化け屋敷でも一人で回る予定と散々ではさもありなん、である。
空気の読めるはやてのことだ、自分の場違いっぷりに辟易していることだろう。

「大体、フェイトとなのはに誘われてノコノコやってきたのはお前だろうが」

事の発端はフェイトとなのはの親切心だ。
休み時間の度に「ヒマー、ヒマやー、どっか行きたいぃ～」などとのたまっていたはやてに気を使って持ちかけたらしい。
……ああ、なんだ。ただの自業自得じゃないか。

「だってー、デートやって聞いてへんかったやもん。知っとったら来たりなんてせぇへんわ」

膨れっ面で腕を組むはやて。「そうですっ！」と籠状のトートバッグからリインフォース妹が顔を出し、同調を示した。

「カップルに囲まれて、独り者のはやてちゃんは肩身の狭い思いをしてるんですよっ！」

ふと目が合う。「ぴっ！」瞬間、奇妙な悲鳴が上がり、水色の妖精は身を震わせてすぐさま引っ込んだ。
思いっきり怖がられてるようだな。まあ、守護騎士連中とはほとんど交流がないし――シグナムとは6年越しのケリをつけておいたが――、無理もないか。俺自身、それほど友好を深めたいと思えな

いでいる。わだかまりが残っているというか、どうやら俺は執念深いらしいから。これもまた、自己矛盾だな。

「……なあ、エルフィ？」

「はい？」

はやてが地獄の底から響く声を発した。壮絶な笑顔を顔に張り付けて。

「だぁれが、独り身で寂しい行き遅れ確定の悲しいオンナやって……？」

「そこまでは言ってないですぅぅ！？」

『余計なこと言うからですよ、エルフィ。おとなしく、おしおきを受けておきなさい』

「お姉ちゃんのはくじょーものーっ！」

同じく、トートバッグに夜天の書の状態で入っていたのだろう、リインフォース姉から無情な通告。彼女の言うところの“おしおき”が始まった。まあ、具体的にはほっぺをつねられてるだけなんだが。

茶番じみた主従コントに送る白けた視線を、金色の少女が遮った。その表情に浮かぶ、わずかな心の揺れを俺は見逃さない。それが何なのかまではわからなかったけれども。

「ユーヤ、エルフィをいじめちゃだめだよ？　まだちっちゃいんだから」

「どっちかっていうとイジメてるのははやてだろ」

「そう、かな？」

悪い顔をして鞄に手を突っ込んでいるはやてを見やり、こてんと

小首を傾げるフェイト。どこかズレた彼女を微笑ましく観察していた俺の耳朶に、何処から悲鳴のような声が飛び込む。
――それはごく微かだったが、確かに凶兆を孕んでいた。

「――いいいいやあああああぁぁぁぁぁぁあっ！！」

恐ろしいまでのスピードで、パステルカラーのナニカが突っ込んでくる。その手はボロ布と化したグリーンのナニカの袖口をがっしりと掴んで。
突然のことに、スイッチが入っていなかった俺は反応できず、至極当然の結果として――

「ぬぐぉっ！？」

牽かれた。ガツン、と。
そのまま走り去るナニカ――というか、なのははご丁寧にも引きずっていたユーノを俺の背中に置いていった。
重い……。

「ご、ごめんよ、ユウヤ」

背中にユーノを乗せたまま、無様に俯せて。目の前では、ぺたりと地面にへたり込み、泣きべそかいているなのはをフェイトがあたふた慰めている。
状況は概ね掴めたけど、とりあえず上の奴に訪ねてみるか。

「何が、あった」
「な、なのはが思いの外怖がっちゃってね……」
「うん、もういい。あらましは把握した……ガンバレ、ユーノ」
「ありが、と……う」

言ったきり、ユーノはガクリと脱力。意識を彼方に飛ばしたようだ。
イノシシ娘に果敢にも挑戦した勇者を振り落とすわけにもいかず、俺はそのままの体勢でくすぶる恐怖に涙するなのはと、彼女を必死で慰め続けるフェイトを眺める。……我関せずとケラケラ笑っているはやてにムカッ腹を立てながら。
なお、お化け屋敷に挑んだフェイトさんは、怖がる素振りなど欠片も見せず、興味深そうに仕掛けや役者を次から次に見抜いていたそうな。
なのはほどとは言わないが、もう少しくらい驚いてくれたっていいんじゃないか？

＊　＊　＊

昼時、休憩所の一角。
各自――俺となのはとはやてが――持ち寄った弁当を広げた備品のテーブルをみんなで囲む。
漆塗りの重箱いっぱいのおかずは栄養バランス完璧で、目にも美味しい。中くらいのバスケットには、やや地味だが堅実で温もり溢れるお袋の味。それから、たこさんウインナーに顔つきおむすびなど、女の子らしい気配りの行き届く料理の詰まった黄色いお弁当箱。
俺とはやてはまあ当たり前として、なのはの弁当もなかなかの出来映え。ユーノの奴など感涙しておむすびを食べていた。
気になってる娘に、上目遣いで「どう……かな？」なんて聞かれたら、嬉し泣きしてもおかしくないな。
「なんだか遠足みたいだね～」
ほこほこ笑顔のなのは。その日だまりのような――悪く言えば、

のーてんきな雰囲気に触発され、「そうだなぁ」と和む。
テーブルの上では、リインフォース妹が小さい身体でおかずと格闘している。親睦を深めるために餌付けでもしてみるか？

「芸術の秋、スポーツの秋、行楽の秋、読書の秋……秋にもいろいろあるけれど」
「はやてちゃん？」

唐突に、はやてが何か悟ったような顔をして語り出す。その空色の瞳は、幸せそうにおかずをつまむフェイトに向けられていた。
たぬきの戯れ言は聞き飽きているので、まるっと無視してなのはお手製のたこさんウインナーをパクつく。……んむ、うまい。

「フェイトちゃんの秋は、食欲の秋みたいやね」
「うぐ……」

芋の煮っ転がしを頬ばっていたフェイトが、気まずそうに視線をついと逸らす。
ふふん、と鼻を鳴らしたはやて。「フェイトちゃん――」そのわかりやすい反応に気をよくしたのか、悪そうな笑顔を浮かべて畳み掛ける。
コイツ何かやらかすな。そう見抜いたが、おもしろくなりそうなので静観を決め込む。

「最近、太ったんちゃう？」
「！！！！」

絶句。
ショックのあまり凍り付いたフェイトの手から箸が滑り落ち、プラスチック製のテーブルの上でカランカランと甲高い音を奏でる。

なるほど、図星か。
しかし、太った、ねえ……。
茫然自失でプルプルと肩を振るわせるフェイトの全身を、一通り眺めてみる。
ジロジロ、ジロジロ。あ、赤くなった。
ふむ。何度見返してもかわいくて綺麗だけど――
「確かに、輪郭がふっくらしてきたような気もするね」
主に胸とか腰回りとか。一段と女の子らしくなってちゃってまあ。
「！！」
さらにフェイトが絶句する。
真っ白に燃え尽きたように力なくうなだれた彼女は、滂沱の涙をそのルビーの瞳から零しだした。――って、ちょっ、涙流すほどのことかっ！？
「うっわ、エグいわ。まさかそこまではっきり言うてまうとは」
「攸夜くんひどい、ひどいよ！　女の子にそれは禁句だよ！」
罪悪感広がる俺の胸に、はやてとなのはの糾弾が突き刺さる。
唐突に、フェイトがガタンとイスを倒しつつ立ち上がった。
「ダイエットする……、今からダイエットするっ！！」
どどーん。
仁王立ちして、拳を握るフェイトの背後に打ち寄せる高波を幻視した。

「フェイトちゃん、ちょっと脈絡ないよ？」
「そうだね。フェイト、少し落ちつきなよ」
なのはとユーノが口々にたしなめるも、フェイトは狼狽激しく聞き入れない。
ダイエット、か……。
後にはやてから聞いた話だけど、この時の俺はとてもやらしい顔をしていたらしい。てか、やらしい顔って何さ。
「ふぅん……じゃあ、このデザートは要らないんだね」
言いながら、三十センチ四方ほどの厚紙で出来た箱を月衣の中から引き寄せた。
「いつかなのはと約束した、翠屋の味を俺なりに再現した自信作なんだが」
箱を開けると甘い香りがふわりと広がった。その場にいた全員から感嘆のため息が零れる。
ショートケーキに、チーズケーキ。苺のミルフィーユとモンブラン、ガトーショコラ――中に詰まった各種ケーキはどれも会心の出来だ。
おいしそうなケーキを前にして、フェイトはあうあうと意味にならないうめき声を上げて、深刻極まりない表情で悩む。数瞬唸ったあと、薄く頬を紅潮させておどおどと口を開いた。
「だ、だってユーヤ……、太った女の子はいやでしょう？」
「まさか。そんなことで嫌いになるわけないじゃないか」
というか、ぽちゃぽちゃしてるくらいが好みです。

出会った頃のフェイトは華奢というよりも痩せぎすで、痛々しくて見てられなかったものな。

「ほんとに？」
「ほんとに」
「ほんとにほんと？」
「ほんとにほんと。むしろ、たくさん食べてくれるフェイトが俺は好きだな」

言って、微笑む。
途端、お先真っ暗としか言いようのなかったフェイトの表情がぱあっと晴れ渡る。この世の春のような笑顔で「じゃあもっと食べるねっ！」と意気込み勇み、取りこぼした箸を取っておかずをはむはむもぐもぐ食べだした。
うん、フェイトはこうでなくっちゃ。

「あ、悪魔や……！　天パの悪魔がおる……っ！」
「にゃはは……、これじゃあ幸せ太りしちゃうわけだね」

はやての失礼な言い種と、なのはのどこか納得した風な苦笑い。それから、フェイトの無邪気な笑顔が残った。
この日以来、今までにもましてフェイトさんが食いしん坊になったこと。そして、いくら食べても一部を除いて――主に胸とかが――ほとんど太らない体質に、周りの乙女たちが激しく凹んでいたことを追記しておく。

しーん4-5　【新暦71年】

１１月初旬。
天気は快晴、冬の到来はすぐそこだということを感じさせない春めいた陽気。今日は聖祥大、そしてその附属校全体で開催される学園祭――その最終日だ。
この合同学園祭は、金土日三日間の日程で取り行われる。一日目二日目を各校単独の出し物に割り振り、最終日を大がかりなイベントに当てるという大々的なものだ。
一、二日目は主にフェイトたちのクラス――メイド喫茶だった。はやての発案らしい――にお邪魔したり、フェイトと一緒に他の学部や部活の模擬店を見て回った。
メイド喫茶はなのはが居るだけあってかそれなりに様になっていたし、男女各高校の演劇部が合同で演じた「ロミオとジュリエット」も、学生にしては堂に入った演技で見応えがあった。
フェイトなど、劇に感情移入してマジ泣きしてたっけ。
――こうして概ね楽しんだ俺だが、一つ、気になったことがある。
それは衣装。
レースふりふりのエプロンドレスはかわいかったけれども、スカート丈が膝上だったのが気に食わない。何とか二日目だけは都合を合わせてきたユーノは満足していたようだが、俺は本場英国式の膝下丈じゃなきゃ認めないのだ。
この件についても、ヤツとは決着をつけなければなるまいな。
……断じて、断じてフェイトの美脚を他の野郎共に見られるのが腹立たしかったからじゃない。ないったらないっ！

＊　＊　＊

大学部主催で行われたミスコンの熱気冷めやらぬメインステージ前には、たくさんの人だかり。次のイベントを待ちわびる見物人で溢れかえっていた。

俺はその人波から少し離れた片隅でぼんやりと佇み、両手をポケットに突っ込んで準備中のステージをなんとなしに眺めている。

ぱっと見だけど、２０００人はくだらない人が集まっているだろうか。中には見知った顔もちらほらと。目的は俺と同じ、今から始まるメインイベントにして今年の目玉――総合音楽コンクールなんだろうな。

合唱・吹奏楽・バンドなど種類を問わず、一般参加もＯＫという意欲溢れるイベントで、地域の商店の協力を取り付け、優勝賞品十万円分の商品券と副賞の温泉旅行を用意するという念の入れよう。この話を耳にして、このご時世によくやるものだと感心した。

「――うん？」

不意に、観衆がざわつく。

舞台袖から、ミスコンに続いて司会を務める大学生の男女がステージ上に現れた。

開催の前口上は淀みない。

打ち上がった小さな花火の音は、群衆の怒号にも似た歓声にかき消され。メインイベントの幕が賑やかに上がる。

トップバッターは初等部のちびっ子合唱隊。低学年くらいだろうか、十数人がちょこちょこ並んで行進する様はひどく愛らしい。

途端に「かわいい～」という黄色い悲鳴が上がり、「萌え～」という野太い声が聞こえた。……後者は聞かなかったことにしよう、うん。精神衛生上よくない。

さておき。このイベントに、なんとフェイトたちもガールズバン

ドとして参加しているのだ。「今更軽音か」、と内心でツッコんだのは内緒である。
言い出しっぺはなんと意外なことになのはだった。
本人いわく「フェイトちゃんとはやてちゃんが引っ越しちゃう前に、みんなで思い出づくりをしたいの」だとか。
ちなみに、当初渋っていたフェイトを焚き付けたのは他でもない、この俺だ。「フェイトの歌ってるところ、見てみたいな」ってね。
フェイトとはやては卒業と同時にミッドに移り住むことが決まっている。だからだろう、なのはの張り切りぶりは目を見張るものだった。幼なじみと道を違えることに、何かしら感じるものがあると想像するに容易い。
アイツの心境の変化は行動にも如実に現れている。高校進学に向けて猛勉強をしていることもその一つだろう。エスカレーター式で進学出来るからと妥協する気はないらしい。俺も文系科目の家庭教師に駆り出されたしな。
……そういえば、教育系の学科に入りたいとかって言ってたっけ。
ともかく。熱心なことはいいと思う。だが、同時にどこか危うさというか、不安定さも感じた。
今はまだ、“魔法”に打ち込んでいた情熱をすり替えて誤魔化しているだけなのかもしれない。けれども、いつかきっとその気持ちに折り合いを付ける日が来るはずだ。それまではいろいろと試してみればいいと思う。臆せず、何事にも挑戦することが一番大事なのだから。

「……ん？」

――万雷の拍手が響く。
どうやら考え事をしているうちに、ちびっ子合唱隊の演目が終わったようだ。小学生たちはややバラバラに一礼すると舞台袖にはけて行き、次の参加者がスタンバイを始める。

フェイトたちの順番は中盤くらい、まだまだ先だ。
今頃は、舞台裏で出番前の緊張感をたっぷりと噛みしめていることだろう。……フェイト、変にプレッシャーを感じて倒れたりしてなきゃいいんだけど。
恥ずかしがり屋さんな恋人に気を揉んでいると、背後の空間が歪むのを感知した。

（この魔力――）

見知った波動。振り向かず、その人物の名を呼ぶ。

「アニーか」
「はい」

静かな返答とともに、物陰の暗闇から怜悧な容貌を持つ長身の女性が音もなく進み出る。
パリッとノリの利いた黒いスーツを着込み、杓子定規な赤金のストレートヘアと理知的な眼鏡の奥に隠れた瞳は緑。
彼女の名は、アニー＝ハポリュー。“知恵者”の二つ名で呼ばれる裏界の公爵である。
その異名通り、天地開闢の時より蓄積された情報と森羅万象あらゆる知識に通ずる大賢者だ。

「どうした？　ヒト嫌いのお前が俗世に姿を現すなんて、槍でも降るかな」

からかいの言葉はしかし、アニーのポーカーフェイスを崩すには至らない。

「早急にお伝えしたいご報告がいくつかありましたので」

「ほう……、言ってみろ」

なかなか興味を引かれる話題に目を細め、本格的に振り向く。

人間を、ふしだらでだらしのない存在だと毛嫌いするアニーがわざわざ出向いたのだ、よほどのニュースだというくらい馬鹿でもわかる。

「先ず最初に、マシンサーヴァントの量産試作モデルが開発局にてロールアウトしました。これらの稼働データを元に、制式量産タイプの開発に取りかかるとのことです」

「存外に早いな」

「オリジナルから、機能を大幅にオミットした簡易型ですので当然の結果かと。評議会が秘密裏に流していた資金と資材、研究施設の一部を確保、流用した量産体制も整えています」

「さすが“知恵者”、如才ない手配りだな」

俺のあからさまなおべっかに紅潮し、「い、いえ……」と動揺するアニー。相変わらず扱いやすいヤツだ。

「ご、ゴホン！　それから、“箒”の試作品も一応ですが形になったようです」

「ウィザーズワンドのデッドコピー、だったか」

「はい。ですが、未だ要求スペックには程遠い粗悪品でしかありません。どうやら魔導炉の小型化が難航しているようです」

「わかった。その件については姉さんに――いや、テスラに相談しておく。ファー・ジ・アースの魔法技術を再現するには、俺たちが手を貸さなきゃならないからな」

「人員の確保」と「現状戦力の増強」――初期条件のクリアすらまだ先、か。

冥魔との戦争を乗り越えるためには、どちらも達成せねばならない最低限の条件ではある。
だが、この程度のことでヒト嫌いの“知恵者”が俗世に姿を現すとは思えない。そう問うと、アニーは首肯する。
「正式発表はまだですが、第17管理世界にて冥魔が確認されました」
「……！“魔王女”の予言通りとはいえ、半年も保たないとはね。で、ソイツはどうなった？」
「数人の負傷者を出しつつも現地の管理局魔導師によって討伐、その後の出現は未確認です」

顔色一つ変えず、アニーが要点だけを簡潔に答えた。
俺は顎に左手を当て黙考する。シナリオを修正する必要がありそうだ。
冥魔の再来が予測よりもずっと早い。この“世界”は、俺の思っている以上に穢れていたとでも言うのだろうか。当初の予定から大きくズレたわけではないが、このままでは後手に回り兼ねない。
見通せない先行きに苦慮する俺の背後、ひときわ大きい歓声が轟いた。
ハッ、と我に返る。いささか話し込みすぎたらしい。
舞台上に並ぶ五人の少女。彼女らが纏うステージ衣装は、黒を基調に紅を差し色にしたゴスロリ調の――微妙にパンク風味も感じる――ドレス。デザインはやて、製作俺のオーダーメイド品だ。
ユニット名は、なのは命名「りりかる☆まじかる」――ま、まあ、これについてはノーコメントにしておこうか。
（うわ、フェイトってばガッチガチじゃないか）
ステージ中央のマイクスタンドの前、フェイトはまるで油の切れ

たブリキの人形のようにしゃちこばっている。瞳をギュッと瞑り、首もとの何かを強く握って。――あれはペンダント、か？

メインボーカルを務める彼女の両脇に勢ぞろいしたいつもの面々――ギターとベースをなのはとはやて。キーボードをアリサ、すずかがドラムを担当している――は、それなりに緊張感漂う面持ちをしているものの、フェイトのあまりの動揺っぷりに頭が冷えたらしい。心配そうな視線を送っている。

仕方ないな……。

「フェイトーッ、がんばれーっ！！」

“いつでも見てるよ”――そんな気持ちを込めて送った声援に、フェイトがハッと顔を上げた。

視線が交差する。ニッ、と不敵に口角を吊り上げれば、帰ってくるのは控えめなはにかみ。

ふぅ、と小さく息を吐くと、彼女の相好から怯えが消えて。たおやかでしなやかで、けれども自信すら感じる凛とした表情が浮かぶ。それは俺の好きな、凛々しい表情だ。

フェイトが軽く振り返り、なのはたちと頷き合う。

そうして、演奏が始まった。

軽快な前奏を経て、伸びやかで、透き通るような歌声が秋空に響く。“思い出づくり”に相応しい、前向きな詩と力強い旋律。自然と身体がメロディーに合わせてリズムを刻む――そんな歌だった。

仕事に学業に。間を縫って必死に練習した努力の成果が今ここに、結実していた。

「シャイマール。一つ、聞かせていただきたいことがあります」

「なんだ」

視線と意識をステージに向けたまま、むっつりと答える。正直邪

魔くさいんだが。

「何故回りくどい真似をするのです。人間に力を与え、我らの尖兵にするおつもりであることは理解出来ます。ですが、世界結界のないこの“世界”ならばアモルファスで制圧し、戦力化も容易なはずでは？」

アニーらしい、実に現実的で合理的な意見だ。確かに、備えのないこの場所ならば赤子の手を捻るように容易いだろうな。

だが、

「魔王級ならいざ知らず、そこらの侵魔ごときじゃ冥魔には勝てないよ。それは歴史が証明している。“知恵者”ともあろう者が、人間蔑視で本質を見失ったか？」

「しかし……っ」

鼻白むアニー。なまじ理路整然と物事を捉える性質が災いして、反論を紡げない。

「俺たちは、確かに運命をねじ曲げることが出来るかもしれない。けれど、それに立ち向かい、乗り越えることが出来るのはヒトだけだよ」

「……ウィザードたちのように、ですか？」

「そうだ。ヒトの“心”は、計り知れない無限の可能性を秘めているのさ。……それに、簡単に攻略できるゲームに価値なんてないだろう？」

「……」

それっきり、会話は途切れ。

「承知しました。――失礼します」ややあって、“知恵者”が姿を

消す。
俺は空間の歪みが終息していくのを感知しながら、懸命にのどを張り上げ、演奏する幼なじみたちを微笑ましく眺める。こう――、初めての学芸会で頑張る我が子を見守る父親の気分だろうか。
フェイトたちの、元気いっぱいな歌声を俺は心行くまで堪能した。
ちなみに、結果は三位。優勝は惜しくも逃してしまった。
というか、優勝したのはいつの間にか参加していたルー姉さん。どこぞの天文部二代目部長のコスプレで持ち歌を披露する気合いの入りっぷり。
そりゃあ、魔王が本気出したら人間なんて簡単に魅了されるんだろうけどさ……何やってるのさ、てか何やってるのさ。はぁ……。

しーん5　【新暦71～72年】

しーん5　「ハッピー・ニューイヤー」

大晦日。
故郷への帰還、幼なじみたちとの再会、ウィザードとの“喧嘩”と冥魔共との前哨戦、恋人との逢瀬の日々――――些か劇的だった今年も、終わりを告げようとしている。

『～♪』

長方形の大きな炬燵。ぬくぬくの布団に潜り込み、年末おなじみの大型音楽番組を映すテレビを観て、のんびり年末の空気を楽しむ

至福のひととき。そんな俺の傍らにいるのは言うまでもなく我が最愛のひと、フェイトである。
ちなみに、姉さんとエイミーは空気を読んで二人きりにしてくれた。海外に美術品の買い付けに出てる、とも言うが。

「おそば、おいしいね」
「気に入ってくれたみたいで嬉しいよ。蕎麦粉から手打ちした甲斐がある」

この年越し蕎麦、素材から厳選した自信作だ。

「フェイト、お代わりはいるか？」
「うん、食べる」
「よしきた」

炬燵とフェイトの温もりを名残惜しみつつ、キッチンに向かう。台所に立ち、月衣から愛用のエプロンを身につけて、ささっと手早く準備を開始。麺を茹で、出汁を温め直し――
――おお、そうだ。

「天ぷらも乗っけるか？」
「うんっ」

いい返事だ。
よいこのフェイトちゃんには、サツマイモをもう一つおまけしてやろう。この娘は無類の芋好きだからな。

「お待ちどうさま、フェイト」
「ありがとう、ユーヤ」

ついでに作った自分の分も天板に置く。
「いただきます」と声を合わせて、マイ箸で麺をすする。……んむ、茹で加減も完璧だ。悪くない。

「んふふー、おいもおいも♪」

おんぷの効果を乱舞させ、ご機嫌で天ぷら蕎麦を食すフェイト。相変わらず、胸がすくいい食いっぷりだ。いっぱい食べる君が好き――、ってね。
どこぞの志宝エリスの平行存在の影響か、俺とて結構な食い道楽だと自覚しているがこの娘には叶わない。おかげさまで我が家のエンゲル計数は鰻登りである。

「フェイト、俺の芋天食うか？」
「うんっ」
「よし。あーん」
「あーん……あむっ、もぐもぐ――ふふ、おいしっ♪」

つい先日、俺たちは結ばれた。それからというもの、二人の距離は目に見えて縮まったように思う。具体的にはボディタッチ型スキンシップが六割り増し。
精神的な繋がりはもちろん大切だが、物質的な触れ合いを疎かにしてはいけないことを思い知った。お互い想い合っているのに手も触れないのは不健全である。半年前の自分に言ってやりたい、「お前、頭おかしいんじゃねーの？」。
とはいえ、この身は人智を超えた莫大な神秘を秘める超高次元の精神生命体。その気になりゃあ、肉体的接触がなくてもいくらでも料理出来るんだが、そんなの正しい“愛し方”じゃないだろ？
――そもそも俺は、生物の三大欲求とは無縁の存在。肉体的な意味での食欲、睡眠欲、性欲とて単なる娯楽でしかなく、どうとでも

抑制できる。……逆に、娯楽だからこそ快楽主義者は嵌り込むという説もあったり。

嵌り込むといえば、割と関係ない話だが、善徳の魔王たるアル＝シャイマールの活動は、「ヒトの望みを叶え、与えること」なんだ。どんな徳高い聖者も、身の程を超えた力や幸福に溺れることは免れない――要は“誘惑者”と同じで、ヒトを堕落させる方向に特化している。

その上で試練を乗り越えたものに最大級の祝福を贈る、というのが主な流れなワケだ。アイツが師であるからには似てしまうのは道理だな。個人的にも、魔王（サタン）の語源たる“敵対者”に相応しい所業だと画自賛している。

だからなのか、俺は過干渉で尽くしに尽くす――悪く言えば溺愛してしまうタイプらしい。はやてには「攸夜君は過保護やな」とたびたび言われている。

にもかかわらず、フェイトは俺から与えられるものを「当たり前」に受け取ろうとしない。頼るし、寄りかかるし、依存もするが、致命的な部分では自分をきちんと律している――特に戦闘に関してはその傾向が顕著だ――精神はすごいと思う。素直に尊敬するし、余りに高潔すぎてむしろ滅ぼしたくなる。

だってそうだろ？

勇者と魔王は表裏一体、カードの表と裏だ。両者はどこか惹かれ合い、世界の果てで出会して血みどろの闘争を繰り広げる。きっと俺が決定的に間違ったとき、止めて／殺してくれるのは彼女を置いて他にない。俺を一人のヒトとして見てくれているから。

だからこそ、この娘が――、この娘こそがパートナーに相応しいのだと、俺は思う。

「どうしたの？」

「んー」

俺の箸が止まって気になったからか、考え事が顔に出ていたのか……まあ、両方か。

「いや、フェイトがかわいくて惚れ直してただけだよ」

「……っ……」

ふふふ。照れてる照れてる。

俯いた頬を薄紅色に染め、もじもじするフェイトをそっと抱き寄せた。

一瞬身体を強ばらせたものの、嫌がるそぶりもなく。むしろ全身ですりつけるように甘えてくれる。かわいい。

「えへへー」

フェイトが無邪気に笑顔を綻ばせる。ずきゅーん、とハートをガンブルで撃ち抜かれ――天丼だな。

肉体関係を結んでから、彼女の神がかった美貌にはますます磨きがかかり、女性独特の甘い匂いもするようになった。精神的にも一段上に成長したようだ。

正直、その麗しさは姉さんのそれを凌ぐと思う。

もちろん俺だって、位階を上げたはずだ。いや、確実に上げている。今なら彼の“星降る夜の魔王”ですら単独撃破出来てしまいそうだ――いや、それはさすがに無理か。あれアホみたいにチートだし。

「ん……、だ、だめだよ……」

おっと、思わず手が出ちまったぜ。どこに、とか野暮なことは聞かないでくれよ？

俺たちがそういう関係になったことを、なのはたちにはまだ話していない。フェイトいわく「恥ずかしいからナイショ」だそうだ。隠しても、嗅覚の効くはやてやすずかあたりにすぐにバレそうだがな。

つーか、ヤった翌日の夜、リンディさんが壮絶な笑顔で赤飯を出してきたときは本気で焦った。約束破ってすみません。後悔も反省もしないけどねっ！

「いいじゃん、二人っきりなんだし」

「……もお、ユーヤのえっち」

口ではこんなこと言ってるが、フェイトもスキンシップは大好きな娘だ。すりすりと甘えてくる。

と、不意に鳴り響く電子音。フェイトは、するりと腕から抜け出して携帯電話を取る。

……ち、邪魔したの誰だよ。空気読め。

「あ、なのはからだ」

ひどく嬉しそうな声。……し、嫉妬なんてしてないんだからねっ！　――いや、この娘ってばソッチの気もありそうだしさぁ……。

「あのねユーヤ、なのはからのメール、これから初詣しないか、って」

「なるほど、悪くない提案だな」

「でしょ？　あ、あとね、ユーノも来てるみたいだよ」

ウキウキを隠さず、弾むような声で言うフェイト。かわいい。

つーか、なしてユーノが居るんだよ。……まあ、四人で連むのは嫌いじゃないけどな。

「せっかくだ、晴れ着を着ていこう。姉さんが用意してくれていたみたいでね」
「えっ、私、お着物ひとりで着れないよ？」
「大丈夫、俺は着付けできるし。よし、じゃあ行こうか」
「えっ、えっ、えええ～～っ！？」

恥ずかしがるフェイトちゃんは、スタッフ（おれ）がおいしくいただきました。なんちゃって。

＊　＊　＊

近く――と言っても、隣町だが――の神社。
こじんまりとした深夜の境内は静謐な空気に満たされている。
人出はまあまあ、それほど混雑はしていない。

「肌が、ピリピリするな」
「寒いの？」

フェイトが気遣わしげに見てくる。
吐く息は白い。

「いや、ここは神社、いわゆる神域だからな。一応真性悪魔な俺には少々居づらい」

とはいえ、気にするほどでもないのだが。
ここの祀神は誰かな――って、アマ公かよ。道理で“神”の臭いが濃いと思った。
奴（やつこ）さんはこの国の主神にして太陽神、その信仰レベルは世界有数と言えるだろう。まあ、太陽神あるいは光明神ってのは大体にして

強者(つわもの)揃いなんだが。ちなみにウチの姉さんも、一種の光明神なんだぜ？

でだ、アマ公――天照大神は、世界が自主的に神の力を封じている向こう（ファー・ジ・アース）でも、その強大な権能は健在だった。こっちじゃ知らんが、伊勢神宮とかマジやばい。洒落にならん。この俺が、あまりの神通力に境内へ入ることも出来なかったからな。比較的格位の低い神明神社で交渉して、ようやく参拝を許されたぐらいだ。

「ふーん？」

「生返事だな」

「だって、よくわからないし……」

「科学至上のミッド人には理解が難しい概念か」

もともと、こちらは神霊が不在で久しい世界だ。そういう概念が失われていても仕方あるまい。

でなければ、俺が好き勝手暴れられるわけがないしな。

「ま、いいや。なのはたちはどこかな？」

「んーと、鳥居のところで待ち合わせなんだけど……――あっ、きたよ」

ん、確かに。和装姿で赤茶のサイドテールなイノシシ娘と、暖かそうなセーターを着たインテリ眼鏡が人垣の中に見える。

おっと今更だが、フェイトの格好は和装である。

明るい藍色に鮮やかな差し色の入った大人っぽい印象の振り袖に、金色の帯の晴れ着。翡翠の玉を填めた帯留めは俺のプレゼントだ。

俺が青系を特に好む所為か、フェイトはあまり同系色を着てくれない。本人は割と好きみたいなんだがなぁ……。

ちなみに俺は、白いハイネックのインナーに黒いコート、カーキ

色のカーゴパンツだ。特にコートはフードにファーがついてたり、機能美の欠けたお洒落な金具が所々についたお気に入りの一品である。

「フェイトちゃん、あけましておめでとう」
「やあ、二人とも」
「うん。あけましておめでとう、なのは、ユーノ」

やはりしれっと混じている我が心友。どうも、なのはのお宅にお邪魔していたらしい。オイオイ兄弟、ついに親御さん公認ですかァー？

――と、戯れ言はともかく。

晴れ着を肴にキャッキャキャッキャとじゃれ合う女子二人。俺とユーノはそんな彼女らを見て、萌えるわけだ。

ちなみにはやてやアリすずは呼んでない。最近は、この四人で行動することが多くなってきたよなー。

「いちおー、私も振り袖着てきたんだけどー。どうお？」
「あん？　どーでもいい」
「ひどっ！？　扱い悪くないっ！？」
「尺の都合だ、騒ぐな」

うぐ、と黙るなのは。なんともはや、深夜に元気なヤツだ。

ちなみになのはの着物は桃色でした。ありがちだな。

＊　＊　＊

適当に列に並ぶ。

ややあって、俺らの順番が回ってきた。

「「「「「……」」」」

黙し、祈る。魔王が神社で詣でるとはなかなかおかしな構図だが「郷に入っては郷に従え」とも言う、日本独特のごった煮的な文化風土の好いところだな。

と、面白味もなく初詣も終わり、寒い中だべっていたら「何をお願いしたのか」という話題になった。

なのはが「学業成就」、ユーノが「家内安全」、フェイト「家族と友だちの健康」。それぞれらしいが、面白味に欠けるな。

で、俺はと言うと――

「世界平和」

この場合、対象は全宇宙・全次元な？

「す、スケール大きいね……」

「まぁ、ユウヤだから」

「あ、たしかに。ユーヤだもんね」

オイコラ、どういう意味だそれは。フェイトもそこで妙に納得しないでちょーだい。

何となく憮然として、言い放つ。

「……出来るだろ、俺たちなら」

ハッとするフェイトたち。

なんというか、特別なのだ。この四人は。

フェイトと、俺と、なのはと、ユーノと――俺たち四人が揃えば、成し遂げられないことなんてない。なのはやフェイトがはやてを交えて冗談混じりに言う「三人揃えば世界を救える」とは訳が違う。

何せ俺が混じってるんだからな。
……今はまだ未熟だが、いつかは“母さん”のように――、偉大な存在になりたい。善徳と罪悪の狭間に立つ俺にしかない“王”の路を、斬り拓く。創り出す。

「まぁ、それはともかく」

努めて道化の空気を纏い、一人一人に顔を合わせて言い放つ。

「ハッピー・ニューイヤー、これからもよろしくな」

しーん6-1　【新暦72年】

新暦72年　5月

ここミッドチルダ首都クラナガンは、約一年前に起きた冥魔と呼ばれる存在との遭遇と、それに伴う大規模戦闘――後に“冥王の災厄”と名付けられた事変が残した傷痕もようやく癒えつつあり、一応の平穏を取り戻しはじめていた。

しかし、破壊を機に開始された区画整理や非常時の備えなどの整備は未だに続き、慌ただしさは払拭しきれていない。

それはまるで何かに追い立てられるように。

絶え間なく続いていく。

――――戦いは……、“戦争”はまだ始まったばかりなのだ。

しーん6　「あるいはカレとカノジョの事情」

クラナガンの中心地にそびえる時空管理局地上本部ビル、そのほど近くの一等地に立つマンションの最上階。
十五畳ほどの広々とした寝室に、カーテンの隙間から朝日が射し込む。陽の光はキングサイズのベッドにまで延び、清潔なシーツにくるまった一糸纏わぬ姿の男女にかかった。

「――……ん……朝、か……」

黒髪蒼眼の少年――いや、青年が気だるげな動作で上体を起す。
寝起き特有の覚束ない視線が虚空をさまよい、ベッドサイドの時計を捉える。長針と短針は5時半を示していた。
ガリガリと、ひどく寝癖のついた真っ黒な癖っ毛を掻き乱し、間の抜けた顔で大きな欠伸を一つ。隣で寝ている“彼女”には決して見せられない表情だ。

「――……ぅん、んん～」

その“彼女”――フェイト・T・ハラオウンが、悩ましい吐息を漏らし、むずがって寝返りを打つ。まだ彼女の意識はまどろみの底から浮上しきっていない。
攸夜は、そんな。金糸の髪を起こさないようにそっと撫で、するりとシーツから抜け出る。練りに練り上げられた無駄のない、日に焼けた肉体を惜しげもなく披露して。

「さて、と。今日も一日、齷齪(あくせく)働くとしますか」

コキコキ、と首の骨を鳴らし、黒髪の青年――宝條攸夜は、今朝も愛する少女のために活動を開始した。

＊　＊　＊

予定通り、フェイトの中学卒業と同時に攸夜は活動拠点をミッドチルダに移した。

本格的に時空管理局の仕事に携わるフェイトのため――攸夜に対しての人質にでもしようとしたのか、一時地上本部への異動話が持ち上がったものの、社会的な意味で潰されている――、そして攸夜自身の夢（やぼう）を実現するためには必要な処置だ。

もっとも二人にはクラナガンに定住するつもりなどなく、いつか一区切りがついたなら“故郷”に帰ると相談して決めていたが。

冥魔の蠢動はもう始まっており、予断を許さない状況を前に、一刻も早く戦力を整え、裏界の予言者“魔王女”イコ＝スーにより必然の未来として予知されている大攻勢に備えなければならない。

すでに時空管理局内、ミッドチルダ行政府内で一定の影響力を得ている攸夜は、この機会を利用して両者を完全に掌握するつもりでいる。

なんだかんだ言っても裏界魔王、権力志向の強い攸夜だった。

＊　＊　＊

時間は飛んで、7時頃。

白と黒を基調とするすっきりとした機能的なダイニングキッチン。奥にはベランダに面した広々としたリビングが繋がっていて、家具は壁や収納などに調和したモノクロのシンプルでモダンなもので揃えられている。

清潔感のある室内は隅の隅まで掃除が行き届き、さりげに几帳面

な家主の性格をよく反映していた。
仲間内から「愛の巣」と揶揄されるこのメゾネットタイプのマンションは、部屋四つにリビング、ダイニングキッチンを備えた造りをしており、二人で暮らすには少々広すぎる――実際部屋が余っている――が、訪れる人々の頻度や多さを考えたならば適切と言えるだろう。
ここは、ミッドチルダに越すに当たって数ヶ月前から住宅情報誌を見繕い、ふたりで一緒に決めたふたりだけの“城”だ。
家賃や光熱費は折半――攸夜の割合がかなり多いことをフェイトは知らない――で、執務官という歴とした職のあるフェイトは当然として、攸夜も“箒”に関連するパテントや最高評議会との契約金などなど、収入源をしぶとく確保していた。
地獄の沙汰も金次第、と言うわけだ。
ちなみに、当たり前のことだが、リンディ、アルフの両保護者から同棲の許可を取る際に熾烈な攻防があったことを追記しておく。

「「いただきます」」

白いダイニングテーブルにつく二人。どちらもワイシャツにスーツのボトムという格好で、これから仕事に向かうということが窺える。
攸夜の首筋にくっきりと残っていた痕は、幻術でごまかしていた。もう慣れたものだ。
今朝はベーコンエッグにサラダ、トーストのごくシンプルな献立。攸夜としては白いご飯に納豆とみそ汁、焼き魚の純和風な朝食が好みだが、納豆が苦手なフェイトに配慮してこういった洋食をメインに置いていた。

「……」
「……（はむはむ）」

「……」
「……（もぐもぐ）」

穏やかな朝食の時間。
二人とも食事中はあまり喋らない方であるし、アイコンタクトで大抵のことは通じ合えるのだから無用な会話は必要ない。
新婚と熟年の雰囲気を併せ持つ二人だった。

『続いてのニュースです。ジェイル・スカリエッティ被告の三回目の公判が――――』

リビングのテレビから、朝のニュースが流れている。
今年初頭に起きた大物次元犯罪者の電撃的な逮捕は、管理世界社会全体にも相当の衝撃を与えたようで、逮捕から3ヶ月以上経った今でも連日のように報道が続いていた。
幾つもの罪状を抱えるこの男の裁判はいつ終わるともしれない。
――しかし、裏の事情を事細かく把握する攸夜ならば、“茶番”の一言で断じるだろう。
どういった判決が出るのかを、彼は知っている。
何せ、男の隠れ家を暴き、捕縛して、あまつさえこの茶番の筋書きまで書いた張本人なのだから。

「……」

ミルクがたっぷり注がれた黄色いマグカップに口をつけたまま、フェイトがじっとテレビ画面を複雑な心境で注視している。
浅からぬ縁――自分が“造られた”遠因と目される男の裁判、その成り行きに少なくない興味を引かれていた。

「やっぱり自分の手で捕まえたかった？」

「……そんなこと、ないよ」

フェイトの表情が陰る。

その言葉はごまかしだと看破した攸夜は、トーストにマーガリンを塗りながら本心の一部を打ち明ける。

「悪かったと思ってるよ、相談もなしに潰しちまってな。まあ、ヤツがバラ撒いていた玩具（オモチャ）が些か目障りだったから、排除したんだけどさ」

「だから別に……だいたい私、あの人について捜査してたわけじゃないもん。気にしてないもん」

「ならいいけど」

やけくそ気味な言葉に胡乱げな視線を返しながら、攸夜がキツネ色のトーストにかじりつく。サクサクふわふわな焼き上がりに満足した。

一方、フェイトは信じてなさそうな攸夜の声色に腑に落ちないものを感じつつも、このまま否定し続けることの不毛さをわかっていたので話題を転換する。

「そんなことより、約束ちゃんと覚えくれてる？」

「もちろん。俺に会わせたい子がいるんだろ？　キャロ、だっけ」

「うん、キャロ・ル・ルシエ。ちっちゃくて、ピンク色で、かわいい子なんだよ～」

「……犬猫じゃないんだから、そう何人も拾ってくるのはどうかと思うけどね」

件の少女を保護するに至った大まかな経緯を聞き及んでいる攸夜は、皮肉気味な言いようで興奮気味のフェイトをたしなめる。

今のところ自分のことでいっぱいいっぱいな彼女が、誰かを背負

っていけるような女の子ではないことを彼は知っている。それゆえの苦言。
頭を冷やされ、少し冷静になったフェイト。うつむいて唇を軽く噛むと、訥々と心情を零す。

「……だって、強すぎる力を持ってるから追放されて、強すぎる力が扱いきれないから使いつぶされて――そんなの、ぜったい間違ってるよ。
キャロはまだ小さい女の子なんだよ？　それなのにひとりで……、たったひとりで放り出されて。そんなのってないよ……」
「フェイト……」
「……ユーヤも、私と同じ立場だったら、助けてあげるでしょう？」
「まあ、な」

期待の込められた熱い視線に耐えかねて、攸夜は曖昧な返事をする。諸手を上げてフェイトの言葉を肯定するには、彼はいささか汚れすぎていた。
たしかに、目の前にそんな娘がいたら手を差し伸べてしまうだろう、と攸夜は思う。自分のことを快楽のために善行を成す偽善者だと分析する彼だ、そんなさも正しいことが出来る恰好の機会を逃しはしない。
だが、心から助けたいと願うフェイトに比べてなんと醜いことだろうか。
反吐が出る、と自虐した攸夜は非生産的な思考を一時振り払って、この話題を切り上げるべく締めに入った。

「――ともかく。6時にターミナルで待ち合わせってことでいいか？」
「うん、それでいいよ。着いたら連絡するね」
「りょーかい。あ、ウチに泊めるんだよな？」

「そのつもりだったんだけど……だめ、かな？」
「いや、問題ないよ。それなら外食より、ここで夕食にした方がいいかなってさ」
「あ、うん、いいかも。名案だよ、それっ！　お夕飯はオムライスがいいなぁ……」
「まあ、食べたいと言われれば作るけどさ。自分が食べたいだけじゃね？」

大好物の味を想像し、ぽわわんと陶酔してとろけた表情のフェイトをツッコミつつ、攸夜が呆れ混じりの苦笑をもらした。

＊　＊　＊

出勤間際。玄関、エントランスにて。
黒い制服の上着を着込み、どこから見ても立派に管理局執務官なフェイト。心なしか表情もきりりと凛々しい。
その後ろには、ワイシャツの上からシアンブルーのエプロンをかけた――エプロン姿がやけに似合っている――攸夜が、まるで影のように付き添っている。この立ち位置が、彼らの関係性を如実に表しているようだった。

「これ鞄な。弁当は入れといたから」
「うん、ありがとう」

攸夜からフェイトへ黒革の頑丈そうなビジネスバッグが手渡された。中には言葉通り、愛妻ならぬ愛夫弁当や仕事に必要な書類などが収められている。

「ん？　フェイト、タイが曲がってるよ」
「えっ、あ……っ」

不意に顔を近づけ、わずかに歪んでいた黄色のリボンタイを直す攸夜。さっと薔薇色に染まったフェイトの顔色に気づいているのかいないのか。

ともすれば、こうして最近ますます男っぷりを上げ、勇ましく精悍になった相好と対面しているフェイトだったが、そうそう慣れるものではなく。生娘でもあるまいに、どきどきと胸をときめかせていたりする。

「これでよし、と」

「あ、ありがとう……」

「ん。そうそう、ハンカチは持った？　忘れ物はない？」

「うん、だいじょうぶだよ」

心配性のお母さんみたいだ。過保護なセリフに微苦笑したフェイトは、出勤前の“儀式”をすべく瞼を伏せて、攸夜の首に腕を回した。

ちょんとつま先立ちで顎はやや上向きにした彼女の腰を、攸夜が優しく抱き寄せる。服の上からでもわかる腰のくびれ、胸板に押しつぶれるたわわに実った柔らかな双乳――今更照れ入るような間柄でもないが、美人は三日で飽きるという言葉は嘘だと実感している攸夜を魅了するには十分だった。

かわいらしくおねだりする最愛の女性の、ぷっくりとして艶やかな花唇を、いつものように塞いだ。

「ん……」

攸夜の広い背中に手を回し、ギュッと抱きしめたフェイトの胸中は、幸福感と充足感でいっぱいになる。こうして、ハードな仕事をこなすための勇気と英気を分けてもらうのが最近の彼女の日課だっ

た。
たまゆら、そのままで。お互いの体温を感じあい、刻みあう。
「はふぅ……」
「じゃあ、いってらっしゃい、フェイト。気をつけて」
「……うん。いってきます、ユーヤ」
名残惜しそうに、恋人の頬へちゅっと短く口づけて、若き執務官は自らの戦場（しごとば）へと向かうのだった。

しーん6-2　【新暦72年】

ドレスルーム。
全身を映す姿見の前で、トレードマークのボサボサ頭をオールバックに撫でつけた攸夜が、蒼い無地のネクタイを締めている。慣れた手つき、慣れた手順で危なげない。
ネクタイを締め終え、紺色の背広に袖を通す。その胸ポケットに正方形に四つ折りし、さらに三等分したポケットチーフを頭が覗くように差し込んだ。ネクタイと同じ鮮やかなシアンブルーは攸夜のシンボルカラー。濃紺のビジネススーツと合わせて、バリアジャケットを思わせるこの衣服が彼の仕事着だ。

「よしよし。今朝もキマってるな」

姿見の背広姿を見て、攸夜が満足げに頷いた。
フェイトを送り出したあと、攸夜はこの二ヶ月ほどで日課となった家事を処理していた。
朝食の後かたづけを皮切りに、各部屋の掃除――特に寝室は念入りに――、衣類の洗濯、ゴミ出しなどなど。テキパキ動作は淀みなく、ハウスメイクを完璧に仕上げる手際はまさに芸術的。メイド魔王に師事していただけのことはある。
家の仕事は二人で分担すると同棲を始めるときに――全て自分がやると主張する攸夜を、フェイトが押し切った形で――取り決めたのだが、本格的に入局し、執務官としての職務が増え始めたフェイトは毎日帰ってくるだけで精一杯の有様。攸夜の分担が増えることは明々白々、自然の成り行きだった。

そのことについてフェイトは忸怩たるものを抱えていたものの、一方の攸夜は嫌な顔一つせず、むしろ最愛の恋人の世話が出来ることを至福の喜びに感じていたりするから始末に負えない。転生を経由した志宝エリスから性質の一部を引き継ぎ、家事全般を苦にしない性格の攸夜にとっては大した労力ではなく、加えて当初から一人で全てやるつもりだったのだから今更である。

そんな感じで今のところ、二人の間に不和は起きていない。

――そんな攸夜だが、彼は彼で管理局関係者との打ち合わせ、各管理世界政府の要人との密会、犯罪シンジケートの撲滅、発生した冥魔の駆逐、勝手気ままな魔王の相手とその他諸々――かなりのハードスケジュールを東奔西走とこなしている。

だが、基本的に彼の移動手段は次元すら越える空間転移――普通に徒歩などで移動すると絶望的に迷うため。たまに転移事故を起こしたりもする――であるし、その気になれば現し身の一つや二つ創って替え玉や人手にすることも容易い。だから、フェイトが帰宅する時間に合わせて夕食や風呂を用意しておくことなど造作もなかった。

それに、どこに居ようが関係なく、攸夜にはフェイトの居場所が手に取るようにわかるのだ。比喩ではなく、事実として。

理不尽極まりない異能を私生活にも遺憾なく、さりとて無駄に活用している攸夜だった。

「っと、そろそろ行くか」

どこへ出しても恥ずかしくないビジネスマン然とした装い。冬場はこの上からベージュのトレンチコートを羽織るのが彼のお気に入り。おっさん臭いともっぱら不評だが。

室内の最終確認を終えた攸夜は、ワックスがけがされてツヤツヤの革靴を履き、ご丁寧にも玄関から外に出る。「ロック」の一言で戸締まりをしてから空間を歪め、黒い闇に溶け込むように攸夜の長

身は消えていった。

＊　＊　＊

ミッドチルダ某所。
全容もわからないほどにほの暗い室内、三本のシリンダーが妖しく輝く。
超巨大組織、時空管理局を開設当時から牛耳る「最高評議会」――その隠れ家であり、攸夜の主な仕事場の一つだ。
ここで最高評議会と攸夜とで毎日行われる定例会議が始まる。
秘書役のアニー＝ハポリューが書類片手に佇んでいた。

「やあやあ、みなさん。今日もお元気そうで何より」
『それは肉体を捨てた我らに対する皮肉か、シャイマール？』

ほとんどタイムラグなしで転移した攸夜は、軽薄な薄笑いを浮かべ、軽薄な物言いを脳髄たちに投げかける。
機械によって合成された音声が、器用にも声色に込められた不愉快さまで再現して彼を迎えた。

「とんでもない。俺は評議会の皆さんと仲良くしたいんですよ。一緒に世界をより善くしようと企むナカマじゃないですか」
『フン、心にも無いことを』
『お前が無断でスカリエッティを捕縛した事、忘れたとは言わせんぞ。火消しにどれだけの労力を払ったと思っている』
「やだなぁ、あなた方の暗殺を未然に防いで差し上げたというのに。感謝されることはすれ、非難される謂われはありませんよ？」
『感謝しないとは言わん。しかしやりようを考えろ、と我々は言っているのだ。お前の勝手の煽りを受けて、こちらの研究機関は軒並み壊滅したのだぞ？』

「世の中の片隅が綺麗になっていいことじゃないですか。中将閣下も検挙率が一気に上がって喜んでいるでしょう」
『そのレジアスだが、今年度の予算が例年にも増して減ったと愚痴っておったがな。開発費と設備投資費が嵩んで管理局の財政は火の車だ』
『我々が確保していた機密費やプール金の一部を放出して補填せねば、破綻しかねなかったぞ』
『“世界樹計画”についてもそうだ。冥魔打倒に必要不可欠だとは理解しているが、あの全容はお前の個人的な趣味だろう？　過剰戦力だという、各管理世界の政府や聖王教会からの突き上げをどうしてくれる』
「はてさて、何のことやら」

糾弾を、あからさまなお為ごかしで飄々と受け流す攸夜。梨の礫というか、破天荒な孫に振り回されるお爺ちゃん状態で、もはや利用するどころではないようだ。
このような間柄になるまでに、血で血を洗う血みどろの抗争が繰り広げられた、かどうかは定かではない。ただ、攸夜が身内以外に対する容赦をカケラも持ち合わせていないことと、最高評議会が魔王の――人知を越えた存在の恐ろしさを嫌と言うほど教えられた、ということだけは述べておく。

「前置きはこれくらいにして。アニー、今日の報告を始めてくれ」
「はい。ではまず、各部に配備されたマシンサーヴァント制式仕様の稼働状況ですが――」

静観していたアニーが、手元の資料を捲りながら報告を開始した。
マシンサーヴァント。それは、ファー・ジ・アースの“錬金術師”が用いる機械仕掛けの使い魔の総称である。
獣、鳥類、幻想類はもちろん、人型にデザインされた個体も存在

し、ここで話題にされているのは人型――いわゆる、ヒューマノイドタイプのものだ。
本来、“錬金術師”でなければ扱えないところを不必要な機能――主に戦闘力、武器変形機構など――のオミットで解決、先行試作型の試験運用を経て、この春晴れて実戦配備に成功した。
開発局の有志と、監修に携わったテスラ＝陽炎＝フラメルの努力の結晶である。彼女の協力を得るために、攸夜はチョココロネを山ほど焼く羽目になったのは全くの余談だ。
現在、管理局で稼働しているマシンサーヴァントは全て魔力炉を内蔵しない充電式で、オペレーターなどの非戦闘員系業務を担当している。ミッドチルダの優秀な人工知能技術を応用、ヒトと遜色ないコミュニケーション能力を備えた“彼ら”は、人手不足にあえぐ時空管理局のまさに天の助けとなった。
現在、２０００体を越える機械の友人たちが、地上本部や本局にて日夜を問わず人々の未来のために働いている。
なお、特にゴタゴタもなくマシンサーヴァントが受け入れられたことに攸夜は驚いていたりする。インテリジェントデバイスという前例の存在を加味しても、ミッドチルダや管理世界の民度はおおむね高いらしい。
とはいえ、協力者である“詐術長官”カミーユ・カイムンと“告発者”ファルファルロウを使って、ヒューマノイド・ロボットに関係する条文を管理局法にねじ込む作業は忘れていない。人間社会において法定遵守と根回しの大切さは説明するまでもなく、自ら隙を招くような迂闊な真似はしなかった。

「“教育”の方はどうです？」
『至って順調だ。――まったく、老骨をこき使いおって』
「亀の甲より年の功、未来の管理局を担う人材を自らの手で育てられるんです。本望でしょう？」
『……忌々しいが、否定出来んな』

マシンサーヴァント、そして未だ完成を見ない“上位機種”の基礎人工知能の教育は、評議会と管理局魔導師が保有する優良なインテリジェントデバイスのコピーデータが担当していた。
任務の内容に合わせて最適化された知識はもちろん、道徳や一般教養、人間関係を円滑に進める諸々の術を学ぶ。そして、規格化生産された“身体”にデータを移植することで“彼ら”は生まれ、その後、それぞれが経験を積み、それぞれの個性を得ることになる。

「それから、無限書庫の“秘密侯爵”よりギャラクシアンライナー建造を要請する上申が」
「……あの鉄子め。銀河鉄道でもＳＤＦでも、落ち着いたら好きなだけ作ってやるから大人しくしとけと伝えておけ」
「了解しました。では続いて、教導隊にて試験運用中のガンナーズブルームおよびウィッチブレードについてですが――」

会議は続く。
この後、報告に基づいて今後の方針の決定や、遂行中の計画の微修正などが話し合われるのだが、管理局全体の運営について攸夜は完全にノータッチ。口出しは基本的にしない。
それは門外漢だからというより、必要がないからだ。
最高評議会には長い間、時空管理局の巨体をある程度維持してきた実績がある。よほどのことがない限り、下策は打たない。
実際、攸夜は最高評議会をお人好し集団だと見抜いていた。切羽詰まれば手段を選ばないだろうが、必要に迫らなければ間違った道は取らないだろうと。
――攸夜にとって、ここにある“遺物”たちは合従連衡の間柄であるが、同時にいつでも蹴散らせる路傍の石でしかない。そうしないのは利用するに足りる価値があるから、というのは建前で、単にその後に起こるであろう混乱の処理が面倒なだけ、眼中にないだけ

だ。「黄河は水溜まりを叱らない」のである。
最高評議会が真っ黒なのは攸夜とて重々承知している。だが正直、彼らが人体実験をしようが何をしようが知ったことではない。それで“世界”がよりよくなるのなら、嫌悪しつつも賞賛するだろう――身内に被害が出ない限りは。
フェイトに述べた「命を冒涜する真似は嫌い」とは所詮その程度の、信念とも呼べない張りぼてだった。
最大多数の最大幸福――それが人間社会の正しいあり方、最良の理論だと。肝心なのは、幸福の範囲を最大限にまで広げる努力と、こぼれ落ちてしまう人々を救う仕組みを作ること、そしてそれを“みんな”で維持することだと攸夜は考えていた。「独りでは何も出来ない」――この言葉は、その考え方を象徴している。
「悪党に人権無し」を信条とする宝條攸夜という“人間”の思想の本質は、「管理と統制」――最も正しく、最も賢い、統べるに値する能力と意志を持った指導者によって統治・管理された世界こそが理想郷である、という典型的な独裁者の思想だった。
つまり、攸夜と評議会は同じ穴の狐、同類というわけだ。
――考えてみてほしい。
攸夜は破壊神シャイマールのレプリカだ。皇帝（カイザー）シャイマールとはその称号通り、群雄割拠の裏界（ファーサイド）を圧倒的な武力によってまとめ上げ、裏界帝国という国家を造った始祖王（カリスマ）を指す言葉である。
その王の子を自称し、彼あるいは彼女から知識と記憶を引き継いだ攸夜が、そういった考えに行き着くのは当然の結果だった。
極端な話、民草が安寧と幸福を得るなら、思想まで統制された完全な管理社会を肯定しかねない。もっともエゴイストな攸夜であるから、自分とその周りが対象になれば断固として拒絶するだろうけれども。
それでいて、自らが支配するという直接的な行動に走らないのは、世界が一部のイデオロギストのものではないと理解しているからだろう。由らしむべし、知らしむべからず――結局のところ、民衆は

自分たちの頭がすげ変わろうとどうでもいいのだ。雨風がしのげる場所と一日の食事、明日へのわずかな希望さえあるのならば。

あるいは――

すでに攸夜は“世界”を手にしているからなのかもしれない。

……フェイトの傍らという、彼だけの、何ものにも代え難い“世界”を――――

しーん6-3　【新暦72年】

夕刻。
ミッドチルダ各地方から出発した列車が集う鉄道の中心地、巨大ターミナルビル。ここに停車する様々な列車目当てに、某魔王が毎日通っているらしい。
そんな余談は、ともかく。
おなじみ黒い制服姿のフェイトと並ぶ、桃色の髪と同じ色のワンピースと白いブラウスでおめかしした7、8歳くらいの女の子――キャロ・ル・ルシエは、刻々と高まる緊張に身を強ばらせていた。
抱えたバスケットから顔を出した銀色の仔竜フリードリヒが「きゅる、きゅるる～？」と心配そうに見上げているが、それにすら気づいていない。

（うぅ～、どうしよう……）

手はじっとりと汗ばむ。ストレスを原因とする生理的反応が、彼女の精神状況を如実に表していた。

「キャロ、どうかしたの？　おなかすいた？　あ、もしかしてお手洗い、とかかな？」

そんなキャロの様子を怪訝に思ったフェイトが膝を折りつつ、顔を覗く。
服装が執務官制服のままなのは、仕事を早めに切り上げたその足でキャロがお世話になっている地方の保護施設まで迎えに行ったたた

めだ。

「ぁ……、だ、だいじょうぶです、フェイトさん」

「そう……？」

腑に落ちない顔をしているフェイトに曖昧な笑みを返して、キャロは抱えたバスケットをギュッと抱きしめた。

彼女がこれほど緊迫している原因は、これから会う予定の男性にある。

窮状から救ってくれ、今は強く信頼し尊敬するフェイトから人となりや馴れ初めをのろけ混じりに聞かされているけれども、まだ見ぬ男性との対面に不安は膨らむばかり。今よりも幼い頃、とある事情から住んでいた里を放逐され、それなりに苦労を経験したキャロが見ず知らずの男性に恐怖と警戒感を感じるのも無理からぬことだろう。

「――あっ、ユーヤっ！」

屈んだままの体勢でキャロを心配そうに見ていたフェイトが、突如立ち上がり、弾けるような笑顔でぶんぶんと大きく手を振る。

クールで物静かだと思っていた恩人のイメージを、粉々にぶちこわす無邪気さに面食らったキャロ。なんとか復帰した彼女は、フェイトの視線の先を遅ればせながら追いかける。

やや遠く、鷹揚に手を振り返しながら近づいてくるスーツ姿の青年が見える。遠くからでもわかる特徴的な黒い癖っ毛を、キャロは「ワカメみたい……」と何気なく思う。密かに彼が気にしていること言い当てるあたり、子どもは残酷である。

青年は、大股歩きで近寄りながら、精悍さと稚気を併せ持った面差しを朗らかに相好を崩した女性にまっすぐ向けていた。

１７０センチ台後半の大柄な男の人の接近に、言い知れないプレ

ッシャーを感じるキャロの横、フェイトは驚くほど綺麗な表情で青年を迎えた。

「時間ピッタリ、だね」

「あんまり待たせるのも悪いから、早めに出たんだ」

それでもギリギリだったけどね。苦笑混じりに青年が答え、フェイトがくすりと笑みをこぼす。

短いやりとりだったが、表情や言葉の端々に滲み出る信愛は、聡いとはいえまだ子どものキャロでもわかるほど。

（このひとが、フェイトさんのいちばん大切なひと……）

まじまじと自分を見上げる桃色の少女の視線に感づいた青年は、片膝をついて目線の高さを合わせた。子どもの扱いを心得ているのだろう、キャロの感じていた圧迫感が弱まる。

「君がキャロだね？」

「は、はいっ」

「そんなに堅くならなくていいよ。フェイトから聞いてるとは思うけど、宝條攸夜だ。よろしく」

青年――攸夜は微笑から手を差し出す。ひどく優しい、包み込むような声色にわずかにくすぶっていた恐怖心が雪解けのように、ゆっくりとほどけていく。

恐る恐る、キャロは自分の手の三倍はあろうかという大きな手を握る。柔らかく握り返された手の感触は、とてもゴツゴツとしていて頼りがいがありそうに見えた。

（おっきくて、なんだかあったかい……これが男のひとの手なんだ

……）

キャロの胸中に暖かな安堵感が広がっていく。事前に感じていた不安は、いつの間にかなくなっていた。

「きゃ、キャロ・ル・ルシエです。それからこの子は――」

「きゅるる～っ」

「――あっ、フリードっ！？」

籠から抜け出した仔竜は何を思ったか地面に着地すると、白い腹を攸夜に向けて寝そべる。

それは服従のポーズ。鱗の薄い腹は飛竜種にとっては弱点であり、そこを無防備に見せることは最大限の敬意を相手に示しているのと同意義のこと。

初めて会ったひとにこんなことするなんて。愛竜の行動に驚くキャロ。一方、攸夜は、「ほう」と得心したような顔で目を細める。

「俺の本性がわかるのか。賢いな、お前は」

「ユーヤの本性？」

「昔見たろ、“黒い蛇”。竜種とは遠い親戚みたいなものなんだよ」

二人の間だけにしか通じない会話。「で、キャロ、この仔の名前は？」ひとり置いてけぼりのキャロに攸夜が問いかける。

「あ、フリードリヒって言います、愛称はフリード。わたしが里を出たあともずっとついてきてくれて……」

「そうか、いい名前だな。フリード、これからもご主人様をちゃんと護るんだぞ」

柔らかい腹をくすぐられてフリードリヒが「きゅるるる～」と気

持ちよさそうに喉を振るわせる。そんな、すっかり懐いてしまったその様子が何だかおかしくて。
くすくすころころ。キャロが控えめな笑い声をこぼす。
和やかな空気が場に流れ、攸夜とキャロが上手く打ち解けたことに満足して、フェイトがふんわりと微笑んだ。

＊　＊　＊

二人に連れられて、キャロは市内にある彼らの自宅マンションへ赴いた。
帰宅するなり、攸夜はすぐさま夕食の準備に取りかかる。その際、部屋のあまりの広さにキャロの目が点になったり、妹分にいいところを見せようとしたフェイトが自分もやると言い出したりと一悶着あったものの、調理は滞りなく進み――

「いただきます」
「「いただきます」」

キャロとフェイトが並んで、その対面に攸夜という形で白いダイニングテーブルに着く三人。
事前のリクエスト通り、メインは赤いケチャップたっぷりのふわふわとろとろオムライス。それとかぼちゃのポタージュに具だくさんのサラダ。
香りはもちろん、見栄えも美味しい料理にキャロのおなかは我慢しきれず、くきゅーっとかわいらしい悲鳴を上げた。

「あ……」
「くすっ、キャロ、おなかすいちゃったんだね。食べていいよ」
「は、はい……」

真っ赤になったキャロは微笑むフェイトに促されて、ほかほか湯気を上げる少し小さめのオムライスをアルミのスプーンでそっと崩す。黄金に輝く卵とパラッと炒められたチキンライスをすくったキャロはそのまま口に、ぱくり。

――ややあって。

「わぁ！　おいしい、すごくおいしいです！」

十年とないキャロの短い、けれども割と激動の人生のなかでも、これほどおいしいものを食べたことはないと断言できる味だった。

実際、攸夜の料理の腕は一流ホテルのシェフ並だ。食いしん坊なカノジョのために日夜研鑽を重ねた結果である。

「そんなに喜んでくれると、こっちも腕を振るって作った甲斐があるよ」

心からの感想に、攸夜がゆったりと鷹揚に笑む。

「あ、キャロ、グリンピースはちゃんと食べなきゃだめだよ？」

「おっと、君からそんな台詞が聞けるとはね。皿の端にどけてたのはどこのどなたでしたっけ？」

「むっ、それは昔の話でしょ？　いまはもう食べれますっ」

「じゃあ納豆は？」

「……あんなの、人間の食べるものじゃないもん」

「フェイトさんって、グリンピースだめだったんですか？」

「――あっ」

しまった！　と口を両手で押さえるフェイト。しかし、もう遅い。

「そりゃあもう。すごく苦そうな顔をして食べてたよ、食後のデザ

ートにつられてね」
「へー」
「ちょっ、ユーヤ！」
「フェイトさん、ちょっとかわいいですね。意外です」
「だろう？　自慢の彼女なんだ」
「あ、あうう……」

お姉さん風を吹かせようとしたフェイトの試みは、一枚上手な攸夜によって脆くも崩れ去り。のみならず、かわいい妹分に昔の恥部を知られてしまう結果に。
慣れないことはしないに限る、とキャロは学んだ。

――攸夜と同じ量、大盛のオムライスをペロリと平らげたフェイトの健啖ぶりに、価値観の崩壊を感じたり。女の子二人、一緒にお風呂に入ってたくさん話をしたり。
なお、風呂場で交わした会話は八割がのろけだったという。
攸夜はすっごく優しいだとか、いつもは一緒に入浴しているのだとか。
そして、風呂上がり。
膝の上にフリードリヒを乗せたキャロの髪をフェイトが優しく拭き、そのフェイトの髪を攸夜が丁寧に乾かす。
男性にしては手慣れすぎた手つきを不思議に思ったキャロが問うと、ほとんど毎日フェイトの髪をとかしているのだという。
女性にとって髪とは命と同じくらい大事なものだ。同性のキャロから見ても羨ましいほど綺麗な髪をいとも簡単に任せてしまうのは、それだけ信頼していることの証。フェイトさんはユウヤさんのこと、とても頼りにしているんだな。キャロは漠然と、そう思った。
「ユウヤさんはなんのお仕事をされてるんですか？」

「そうだな……管理局員が毎日気持ちよく働ける環境を作る仕事、かな」
「……？」
「つまりね、ヒーローってことだよ、キャロ」
「フェイト、お前な……。とりあえずそれは違うからな？」

「召喚魔法か。珍しいね、こっちの使い手は始めて見たよ」
「そう、みたいですね。故郷ではみんな使っていたから、あんまり実感ないですけど……」
「ふむ、召喚……召喚、か。仕込めばアレを使えるか……？」
「ユーヤ、悪い顔してるよ。なにかか企んでるでしょ？」
「ははは、ソンナコトナイヨ？」

他愛のない会話を交わしたり、家にあったボードゲームやテレビゲームで――どれもこれもキャロは初めてのものだったが、攸夜は丁寧にレクチャーしてくれた――楽しく遊んだり。
当初は遠慮気味にしていたキャロもいつの間にか打ち解けて、無邪気な笑顔をこぼしていた。
その様子はまるで親子……というよりは、遠路はるばるやって来た姪っ子を遊ばせる若い夫婦といった風情。そう見えたのは残念ながら、本当の意味で“親”になる心構えは二人――特に、フェイトにはなかったから。
自分を子どもとしてしか認識できない人間が、誰かの親を務めることなどおこがましい。ましてや未だに、“母”の面影を振り切れていない彼女ではなおさらだった。

＊　＊　＊

夜更け、草木も眠る丑三つ時。

「キャロはこんなに懐いてくれたのに……」

遊び疲れて眠ってしまった少女を膝の上で寝かしつけながら、眉尻を下げたフェイトがぽつりとこぼした。

「どうして、エリオはユーヤと仲良くしてくれないんだろう……」

さらさらと、桃色の柔らかな髪を撫でる。そんなフェイトの胸中に浮かぶのは赤毛のかわいい弟分のこと。

こちらに移る直前、攸夜と顔合わせのために会食の場を張り切ってセッティングした。

けれども彼は、ひどく無愛想な表情で素っ気ない態度をするばかり。平時はとことん鈍いフェイトにもわかるくらいの不機嫌な空気を発して。

結局会食は微妙な雰囲気のまま終わってしまい、以来、攸夜も自分から会おうとは一切しない。「俺に会っても悪影響しか残さないだろうから」と苦笑いするだけだ。

その攸夜は、フェイトの隣で真剣な顔をして彼女の言葉に受け答える。

「あっちが心を開いてくれなきゃどうにも、な。それはわかるだろ？」

「……うん、でも――」

フェイトには、どうして素直でいい子なはずの“弟”が攸夜を嫌うのかわからない、わかるはずもない。――そもそもの“原因”である彼女には。

「まあでも、あの坊やの気持ちもわからないでもないよ。俺も同じ立場なら気に食わないしな」

「……？」

持って回った意味深な言葉に、フェイトが怪訝な顔で小首を傾げた。攸夜はただ穏やかに微笑み、彼女がキャロにするのと同じように金色の髪を撫で、「いつかフェイトにもわかる時が来るよ」とだけ言うと、フェイトの肩をそっと抱き寄せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9979x/

魔法大戦リリカルなのは☆うぃざーずっ！

2012年1月12日23時45分発行